



始



宗教
III
140

宗教
物語
舍身活躍
寅之巻

靈界物語
舍身活躍

寅之卷

宗教
III
140

柳月口述

省
5.8
本

神宗
第
号
V

函	宗教
	III
號	140
永久保存	

特501
247

省務內
13.5.8
正本

出口瑞月口述

舍身活躍

〔靈界物語第三十九卷〕

天聲社發行



1094669



穴太水晶池

序

入岐大蛇や醜狐

暗黒無道の世の中は

常夜の暗の如く也

世道は月に類癡し

兄弟互に相鬭ぎ

朋友信を忘却し

上下は常に反目し

紛擾絶ゆる暇も無く

歌

曲鬼探女の憂れる

仁義道德影も無く

人の心は日に荒び

親子疎んじ睨み合ひ

親戚争ひ相離れ

互に悪罵嘲笑し

意志の疎隔は恐ろしく

資本家労働者相對し

農商工は振起せず
 官民互に卑みて
 主僕疎遠に墮りて
 危機に類して諸々の
 暴戻盛に行はる
 山に隠るひ野に潜み
 奸邪は天下に跳梁し
 亂れ切つたる娑婆世界
 醫學衛生完美して
 交通機關は完備して

不景氣風は吹き捲り
 政令全く行へず
 國家社會は刻々に
 誑詐の曲業時を得て
 忠誠の人士は足曳の
 頭をもたぐる時を得ず
 誠の神は世に出でず
 挽回すべき由も無し
 悪疫益々蔓延し
 有無通するの途もなし

國家の富力増進し
 頭に刻々迫り來る
 殺傷頻りに行はれ
 物價は時々に凋落し
 全くその度を失ひぬ
 兌換借欸滔々
 國防成るに従ひて
 高貴は俗に親しみて
 富豪階級は押並べて
 淫酒の慾を漁りつゝ

而して饑饉は人々の
 法警成るに従ひて
 生産倍々夥多にして
 輸入超過の慘狀は
 國庫漸く窮乏し
 經濟界を危くし
 國辱頻りに興るあり
 卑賤は倍々僭上す
 皆文弱に流落し
 日に夜に社會を汚し行く

貧窮愈窮乏し

都會に住める人々は

奢侈限り無く増長す

純朴の氣地を拂ふ

怪論迷説相ひさぎ

僧侶は教義を曲解し

品行月に墮落しつ

武人は錢を愛着し

商賈は謀計事を爲し

青壯年は惡風に

怨嗟の聲は彌高し

安逸快樂に馴れ染まり

田舎は都會の風に染み

學者の偏狹陋劣さ

宗教宣布に従事する

宗祖の教旨を滅して

精神界を攪亂し

士道全く廢り行く

信用全く地に落ちぬ

眼を眩惑し世に習ひ

競ふてハイカラのみ好む

通ひ乍らも蝶の如

淫靡の風は吹き荒び

社會の秩序を混亂し

賢母良妻家に泣き

藝妓屋娼妓屋繁昌し

國家の元老はたゞすらに

争ひ子分を相募り

黨弊擁護に餘念無く

禽獸叫び蛇を投げ

良家の子女は學校に

紅白粉を塗立て

不良少年續出し

拾收すべからず成り果てぬ

蓄妾常に逸樂す

良家益々相寂し

老後を急ぎ勢力を

政客權を弄び

神聖無垢の議事堂に

雲助畫の行動を

演出するこそ慷慨けれ
 國議を輕視し侮辱して
 國帑を猥りに浪費して
 賦課は益々大なるなり
 眼を轉じて眺むれば
 國交益々非運なり
 噴火山上にある如く
 此をば思ひ彼想ひ
 涙は腮邊に滂沱たり
 救ひて松の神の代に

國家の選良は大切な
 喧々囂々市場の如し
 民の負擔は日に重く
 國家破産の緒を開く
 外侮頻りに相到り
 人の思想は惡化して
 何時爆發も計られず
 夜も碌々に眠られず
 古今未曾有の此慘狀
 開かんための神の道

樹てさせ玉ひし尊さよ
 御靈幸へまし〜て
 誠の神の現はれて
 松間の長き鶴の首
 守らせたまへと祈りまつる
 風伯怒りを相發し
 雷電ひらめき激怒して
 水神忽ち嗔怒して
 海神怒濤を捲き起し
 大地の神は早魘を

ア、惟神々々
 五逆十惡の濁世を
 治め玉はる時はいつ
 龜の齡の常永に
 天地の神も放り坐し
 颶風屢到來し
 天津御空に鳴り渡る
 水難頻りに續發し
 地上の蒼生を洗ひ去り
 もたらし地疫を拂ひまし

地震の神は地軸をば
 汚れし家屋を焼倒し
 地上の汚穢を焼き盡す
 地妖を隈無く塵殺し
 神の恵みの幸ひて
 現はれ來りて天地の
 誠の道に叶ひしと
 民をば常永に救ひまし
 爰に始めて天國は
 無上至樂の代と成らん

時々に動搖し玉ひつ
 火龍は紅蓮の舌を吐き
 軍神怒りて天賊や
 清め玉ふぞ畏けれ
 天來未知の大偉人
 諸の穢を潔齋し
 神に選まれたふせたる
 五六七の御代と成るなれば
 地上に芽出度顯現し
 邪神を懲し善神を

玉仁

救はせ玉ふ御經綸
 是ぞ全く皇神の
 萬代倦まず皇神は
 世人の心いや曇り
 大義を没し名分を
 皇大神は世を歎き
 世人を導き救はん
 大本教を宣り玉ふ
 神の御綱に曳かれつ
 斯の御教を遵奉し

謂ふも畏き限り也
 我等に囑ひし御遺訓ぞ
 神訓垂れさせ玉へども
 神意を解するものも無く
 覺らざるものばかりなり
 神の教を立て玉ひ
 綾の聖地に現れまして
 尊き世は成りにけり
 寄り來る人は押並べて
 模範を世界に示しなば

人は次第に善良の

身魂と化りて世の爲に

盡す真人の生れなば

神は喜び玉ひつゝ

自然に天地は清まりて

五風十雨の順序よく

日月双び輝きて

萬民歡喜の雨に濡れ

草木は縁に禽鳥は

神の御國に泰平を

謳ひて神の御恵みに

浴する御代となりぬ可し

ア、惟神々々

神代の遠き物語

「舍身活躍」寅の巻

序文に代わて述べ立つる

ア、惟神々々

御靈幸へましましてよ。

大正十一年十月廿日

口述者 誠

舍身活躍

〔寅の巻〕

目次

序

歌

説

第一篇 伊祖の神風

第一章 大黒主

第二章 評定

第三章 出師

第二篇 黄金清照

第四章 河鹿越

第五章 人の心

目次

頁

一

二

七

一六

三八

一三八

一六三

七九

第六章 妖霧……………九四

第七章 都牟天……………一一一

第八章 母と娘……………一二八

第三篇 宿世の山道

第九章 九死一生……………一四五

第一〇章 八の字……………一五八

第十一章 鼻滴……………一七二

第十二章 種明志……………二〇一

第四篇 浮木の岩窟

第十三章 浮木の森……………二二三

第十四章 清香山……………二三九

第十五章 焼糞……………二五七

第一六章 親子對面……………二七三

第五篇 馬蹄の反影

第十七章 テームス峠……………三〇一

第十八章 關所守……………三一六

第十九章 玉山嵐……………三三三

附録 大祓祝詞解……………三五三

全身活躍(寅の巻)目次終

第三篇 宿世の山道

第九章 九死一生……………一四五

第一〇章 八の字……………一五八

第十一章 鼻滴……………一七二



舍身活躍

【寅の巻】 [39]

口述者 出 口 瑞 月

筆録者 北 松 村 村 隆 真 澄 光

總 說

神素盞鳴尊が八岐大蛇を言向け和し、遂に肥の川上に於て、手撫提、足撫提の娘
稻田姫命の危難を救ひたまひし神代の物語を續講するに就て、高加索山を中心とし
て先づ五天竺の活動より口述する事と致しました。

オロチと言ふ意義は山の事である。凡て風雲は山より發生するものにしてオロチは産である。山には古來善神も鎮まり玉ひ、又邪神も盛んに潜伏して居た。故に太古の所謂八王入頭の神は山を根據として其地方々々を鎮め守られて居たのも、要するに山岳に邪神棲息して天下を擾亂せしを以て、邪神の本據に向つて居所を定められたのである。又肥の川上といふ言義は日の側陽陰といふことで、朝日の直刺す夕日の日照らす、山の意義であつて、出雲とは雲の發生する高山の意義で今日の伯耆の大山を指したものである。最後に神素盞鳴尊が自ら登山して邪神を滅亡せしめたまひて大蛇より村雲の寶劍を奪ひ、之を天照大神に獻り赤誠忠良の大精神を發揮し玉ひし物語であります。素盞鳴とはスバルタンの意であつて、スは進展、バルは擴張とか神權發動とかの意であり、タンは尊とか君とか頭領とかの意味である。又天照大御神はアテ

ーナの女神又はアポーロの女神と謂ふことになる。アポーロは天原の意味にもなり、葦原は亞細亞の意味であり、葦原はアツシリヤとなりアジアとなつたのである。太古の亞細亞は現今の小亞細亞であつたが、時世の變遷と共に、廣大なる亞細亞となつたのである。

却説五天竺は境周九萬餘里、三垂は大海、北は雪山を脊にし北廣く南狭く、形半月の如く野を劃して區分すること七千餘國、時殊に暑熱激しく地は泉濕多く、北は乃ち山阜軫を隠し丘陵瀉鹵なり、東は則ち川野沃潤にして田園山壘膏腴なり。南方は草木繁茂し西方は土地磽确なりと傳へられて居る。

之に依つて天竺の大概の様子は窺知されること、思ふ。天竺の名稱は隨分澤山あつて異議糾紛し、容易に一定せなかつた。太古は身毒と云

ひ或は賢豆と曰ひ、現代にては正音に従つて印度と云つて居る。印度國は地に隨つて國と稱わ殊に方俗を異にし遙に總名を擧げて其の最も美なりとする名を呼んで之を印度と謂ふのである。印度を唐にては月と謂つた。神代の名稱も亦月と稱わられたのは第一卷に示す通りである。月に多數の名號ありて印度と稱するは其の一稱である。阿毘曇心論の音義にも

天竺を或は身毒と云ひ、或は賢豆と言ふは皆訛なり。正しくは印度と言ふ。印度は月と曰ふ。月に千名有り。斯れ一稱なり。一説に曰ふ、賢豆の本名は因陀羅婆陀那此を主處と曰ふなり、天帝護る所なるを以ての故に之を號する耳云々

又印度の人民には四種の差別がある。まづ第一を刹帝利と云ふ。是は代々王となるべき家柄で則ち五天竺七千餘國の國々の王となつて

居るのである。

第二を婆羅門と云ふ。是を翻譯すれば淨行と云ふことで則ち淨き行と書く詞で國柄相當に有り來つた學問をして代々家を傳へるものである。

第三を毘舍と云ふ。是は商人である。

第四を首陀と云ふ。是は農業を營むもので所謂百姓である。靈界物語第一卷に婆羅門には三階級ある事を口述しておきましたが、それは太古の神代の事であり、印度四姓の第二位のバラモンの部族内に出來た階級である。釋迦の出現した時代にも、地方に由つて行はれて居たのである。

以上言つたのは、總括して印度全体の制度を説いたので、今より三千年以前には印度の人民は前述の如く、刹帝利、婆羅門、毘舍、首陀の四階級と成つて居たのであり

ます。一寸茲に混線せないやうに重ねて述べておきました。

大正十一年十月二十日

口述者 識

瑞 月

瑞の月海に入りてゆ桶伏の

山に輝く新鮮の月

新鮮の珍の月影かくさん

またも荒びん夜根の黒雲

第一篇 伊祖の神風

第一章 大

黒主 (一〇六六)

遠き神代の昔より

天地の神の大道を

説きさとしゆく諸々の

教は千ぐさ萬種

數限りなき其中に

天地を造り固めたる

元つ御祖の御教を

誠の神の表はれて

説きさとしなる三五教

天教山や地教山

貴の都のエルサレム

黄金山下を始めとし

靈鷲山や萬壽山

自轉倒島に渡りては

綾の聖地の四尾山

其外百の國々に

教司を間配りて

立て、五六七の御教に

百の司を任せ玉ひ

三大教や五大教

固め玉ひし三五の

入岐の大蛇や醜狐

天が下をば蹂躪し

醜女探女を数多く

猛びめぐるぞうたてけれ

汚れし靈になり出でし

安く樂しき神の世を

世人を助け守らん

千々に心を配ります

經緯の水火合せ

教を損ひ破らん

曲鬼共の醜靈

此世を曇らせ汚さん

四方に遣はし暗雲に

天足の彦や胞場姫の

曲神共は村肝の

心も清き神司

或は大國彦の神

世に現はれてウラル教

三五教に對抗し

メソポタミヤを遁走し

見棄て、逃げ行くウラル姫

千變萬化の妖術を

狂ひ廻りし醜神の

いよ／＼こゝに述べ初むる

御靈幸はひましませよ。

鹽長彦の体を借り

其外百の神人

バラモン教を開設し

神の光に照されて

或はコーカス山館

性懲りもなくこゝ迄も

使ひて正道を紊さん

常任不絶の物語

あゝ、惟神々々

常世の國の常世城にあつて三葉葵の旗を押立て、自ら常世神王と稱して羽振を利かし居たる大國彦命は、三五教の爲に其惡虐無道を警められ、部下の廣國別をして常世城を守らしめ、ロツキ一山に日の出神と僞稱して大國姫命をば伊弉册命と僞稱せしめ、黄泉比良坂の戦ひに、部下の軍卒は大敗北し、遂にはロツキ一山の鬼となり茲にバラモン教を開設する事となつた。

大國彦命の長子大國別はバラモン教の教主となり遠く海を渡つて、埃及のイホの都に現はれ、其教は四方に旭の豐榮昇るが如く輝き渡り、人心を惑亂して、正道將に亡びんとせし時、三五教の夏山彦、祝姫、行平別外三光の神司の爲に、其勢力を失墜し、遂は葦原の中津國と稱するメンボタミヤの天恩郷に本據を構へ、小亞細亞、波斯印度等に神司を數多遣はして、バラモンの教を擴充しつゝあつた。

神素蓋鳴尊は天下の人心日に月に惡化し、世は益々暗黒ならんとするを憂ひ玉ひて、八人の珍の御子を犠牲的に天恩城に忍び入らしめ、バラモン教を歸順せしめんとし玉ひたれ共、大國別命歸幽せしより、左守神と仕へたる鬼雲彦は、忽ち野心を起し、自ら大棟梁と稱して、バラモン教の大教主となり、大國別の正統なる國別彦を放逐し、暴威を揮ひ居たりしが、天の太玉の神現はれ來りて、神力無邊の言靈を發射し歸順を迫りたれども、素より暴惡無道の鬼雲彦は一時天恩郷を脱け出し、再時機を待つて、捲土重來、三五の道を轉覆せしめんとして、鬼雲姫、鬼熊別、蜈蚣姫其他百の司と共に黒雲を起し、邪神の本体を現はしつゝ、天恩城を立出で、それよりフサの國、月の國を横斷し、磯輪垣の秀妻の國と名に負ひし安全地帯、自轉倒島の中心大江山に立籠り、徐に天下を席卷すべく畫策をめぐらしつゝあつた。

然るに又もや三五教の神司の言靈に僻易し、再び海を渡りてフサの國に向ひ、殘黨を集めて、バラモンの再興を謀りつゝ、私かに月の國、ハルナの都にひそみ、逐次勢力をもち返し、今は容易に對抗す可らざる大勢力となり、月の國を胞衣として、再び天下を掌握せんとし、最早三五教もウラル教も眼中になきものゝ如くであつた。

此ハルナの都は月の國の西海岸に位し、現今にてはボンペーと稱へられてゐる。

鬼雲彦は大國彦命の名を尊ひて、自ら大國彦又は大黒主神と稱しつゝ、本妻の鬼雲姫を退隱せしめ、妙齡の女石生能姫といふ美人を妻とし、數多の妾を蓄へて、バラモン教の大教主となり、ハルナの都に側近き兀山の中腹に大岩窟を穿ち、千代の住家となし、門口には嚴重なる番人をおき、外教徒の侵入を許さなかつた。

ハルナの都には公然と大殿堂を建て、時々大教主として出場し、數多の神司を支配しつゝ、あつた。夜は身邊の安全を守る爲、兀山の岩窟に隠れて居た。此兀山は大雲山と名づけられた。鬼雲彦の大黒主命は自ら利帝利の本種と稱し、月の國の大元首たるべき者と揚言しつゝ、あつた。

月の國の七千餘ヶ國の國王は、風を望んで大黒主に歸順し、媚を呈する状態となつて來た。神素蓋鳴大神の主管し玉ふコーカス山、ウブスナ山の神館に集まる神司も、此月の國のみは何故か餘り手を染めなかつたのである。それ故大黒主は無鳥郷の蝙蝠氣取になつて、驕心益々増長し、今や全力を擧げて、三五教の本據たる黄金山は云ふも更コーカス山、ウブスナ山の神館をも蹂躪せんと準備を整へつゝ、あつた。而して西藏と印度の境なる靈鷲山も其山嶺なる萬壽山も、大黒主の部下に襲撃さるゝこと屢々であつた。

神素盞鳴大神は自轉倒島を始め、フサの國、龍宮島、高砂島、筑紫島等は最早三五
 教の御教に大略信從したれ共、まだ月の國のみは思ふ所ありましてか、後廻しにな
 しおかれたのである。それ故大黒主は思ふが儘に跋扈跳梁して、勢力を日に月に増殖
 し、遂に進んで三五教の本據を突かんとするに立至つたのである。

茲にイソの館の入尋殿に大神は數多の神司を集めて、大黒主調伏の相談會を開始さ
 る、事となつた。日の出別神(吾勝命)、入島主神(熊野樟日命)、東野別命
 (東助)、時置師神(李助)、玉治別、初稚姫、五十子姫、玉國別(音彦)、幾代姫
 照國別(梅彦)、菊子姫、治國別(龜彦)、淺子姫、岩子姫、今子姫、悦子姫、黃龍姫
 蜈蚣姫、コーカス山よりは梅子姫、東彦、高彦、北光神、高光彦、玉光彦、國光彦、
 鷹彦、秋彦等を始め數多の神司が集つて鬼雲彦の大黒主神を言向和すべく協議をこら

された結果、梅彦の照國別、音彦の玉國別、龜彦の治國別並に黃龍姫、蜈蚣姫が直接
 に、ハルナの太黒主の館に立向ふ事となつたのである。

(大正一一、一〇、二二、舊九、二、松村眞澄録)

瑞 月

汚されし神の柱を如何にせむ
 神の御制規を枉ぐる由なし
 曲つ神瑞の御魂を破らむと
 言さやぐかな司のまへに

第二章評

定(一〇六七)

バラモン教の教主大黒主の暴狀を懲らし、言向和して天下の害を除き、入岐大蛇や醜神の身魂を清むべく、ここにウブスナ山脈の頂上イソの館の入尋殿にて神素蓋鳴大神の命により嚴格なる相談會が開かれた。素蓋鳴大神は高座に現はれ一同に向つて歌を以て宣示された。其御歌、

素神「天と地との神々の

水火を合してなりませる

三五教の御教は

島の入十島八十の國

限なく光り渡れども

入岐大蛇の醜神は

未だ全く服はで

山の尾の上や河の瀬に

潜みて枉を朝夕に

柘き行くこそうたてけれ

三五教の神司

清けき明き真心を

力限りに振り起し

天地四方の神人を

評 定

救はん爲めに現身の
 身を粉になして遠近と
 荒野を渡り海を越へ
 雪を踏みしめ暑さを耐へ
 雨にはそほち荒風に
 煽られ乍ら進み行く
 其神業ぞ雄々しけれ。
 時しもあれや天恩の
 郷に現はれ蟠かまる
 バラモン教の大棟梁

鬼雲彦は三五の

誠の道に怯ぢ恐れ

自轉倒島に立籠り

悪しき教を四方の國

傳へんとする其時に

我遣はせし神司

正しき人の言靈に

恐れをなして逃げ歸り

再びフサの國に入り

彼方此方と徜徉ひて

今しも印度の國の都

ハルナに現はれ岩窟を

穿ちて魔神を呼び集へ

其勢は日に月に

侮り難くなりけり

入岐大蛇は悉く

これの都に集まりて

我三五の大道を

覆へさんと圖りつゝ

早くも我の館まで

攻め來らんず勢ひに

四方の曲神勇み立ち

振ひ居るこそ健氣なれ

野立の彦や野立姫

埴安彦や埴安の

姫の命とあれまして

開き給ひし此道は

天と地との神々の

堅磐常磐に動きなき

珍の御楯となりつれば

如何に魔神の驕るども

いかで倒るゝ事やあらん

さはさりながら曲神の

伊猛り狂ふ世の中は

心を許す事勿れ

いざ之よりは神司

神の光りを身に浴びて

大黒主が潜みたる

ハルナの都に立向ひ

仁慈無限の大神の

清き正しき大道に

言向和し來るべく

これに就いては諸々の

神の司は真心の

限りを盡して相圖り

大黒主を懲戒の

神の司を選むべし

我はこれより奥殿に

進みて天地の大神に

嚴の言靈を眞り上げて

我神軍の成功を

祈り奉らんいざさらば

百の司よ神人よ

謹み畏み此度の

言向戦を各自に

心の底より打ちこけて

選みて神の御心に

仕へまつれよ 惟神

神の御前に瑞靈

心を清めて祈ぎまつる」

と宣示し終つて奥殿に姿を隠し給ふた。

思兼神（議長）の格に控へたる日出別神は一同に向ひ

日出別「惟神 イソの館に集まりて

魔神討伐の神議りせん。

大神の珍の御言を畏みて

並み居る司言議りせよ。

バラモンの大黒主の神司

ハルナの都に事を謀りつ。

はかゆとも何かあらんや曲神の

醜の企みは神は許さじ。

素戔鳴の神の尊の御教は

月日の如く牙に渡りけり。

牙に渡る三五の月の御教に

言向和せ大黒主を」

東野別命は立つて之に答へた。

東野別「言靈のイッの館の神司

東の別は言問ひまつる。

大黒主曲の司を言向くる

神の司は何人ぞせん。

聞かまほし日出の別の御心を

重き使を定めかねつ。

この使あまり多くは要るまじと

東野別は思ひ定めつ」

日の出別命はこれに答へて

日出別「日の出別、東の空を分け昇る

三五の月の照らすまに〜。

何人も我と思はん人達は

心のたけを宣り傳へませ」

東野別はこれに答へて

東野別「日の出別神の仰せぞ尊けれ

神言のまゝに選み合ひせん」

時置師神は起ち上り

時置師

「この使、黄龍姫や蜈蚣姫

先づ遣はして瀬踏みをやせん。

二柱神の命はバラモンの

教にゆかり居ます身なれば。

天恩の郷を立ち出で給ひてゆ

久しく會はせ給はぬ身ゆわ。

三五の神の司の行くよりも

蜈蚣姫には心許さん。

蜈蚣姫、黄龍姫は雄々しくも

大黒主を言向和さん」

黄龍姫は起つて歌ふ。

黄 姫「黄龍の姫の命は三五の

道に入りしと彼は知るらん。

足乳根の母の命は今暫し

イソの館に仕へますべし。

年老いし身もちながら敵城に

進まん事の危く思へば」

蜈蚣姫はこれに答へて

評 定

蜈蚣姫「天地の神に捧げし此命

いかで恐れん水火の中も。

大黒主たごへ如何なる力あるも

我言靈に言向けて見ん。

黄龍姫弱き言靈吹き放ち

母の名までも汚すまじきぞ。

我こそはハルナの都に立ち向ひ

鬼熊別の夫を論さん。

大黒主神の司を始めとし

我脊の君を救はんこそ思ふ。

勇ましき此御使に仕へなば

我は死すとも悔ざらましを」

黄龍姫はこれに答へて

黄龍姫「健氣なる母の命の御言葉よ

神の尊さ今更ぞ知らるゝ。

我母は如何に雄々しき神ならん

牙に渡りたる今の言靈。

いざさらば母の命と諸共に

ハルナの都に向はんこそ思ふ」

蜈蚣姫は又歌ふ。これに答へて

蜈蚣姫 「健氣なる黄龍姫の言葉かな

我は勇みて敵城に行かん」

素盞鳴尊の第二の娘幾代姫の夫となりし照國別（元の名は梅彦）は起ち上り、歌を以て所感を述べた。

照國 「神素盞鳴大神の

其御心を細さに

日の出の別や入島主

尊き神が在しながら

満ち足らはせし梅彦を

蜈蚣の姫を推薦し

いと嚴かな御宣言

受け入れ給ひし神司

東野別や時置師

神の力を身に魂に

他所に見なして黄龍姫

給ひし事の恨めしさ

我は照國別の神

勇氣は日頃に百倍し

はや堪へ難くなりけり

我を選ませ給ひなば

ハルナの都に立向ひ

縦横無盡に發射して

言向和し神徳を

輝きまつるは目のあたり

一度に開く梅彦を

如何に尊き黄龍姫

尊き神名を賜はりて

心は勇み腕はなり

並び給へる神司

大黒主の立て籠る

千變萬化の言靈を

魔神を一人も残さず

月日の如く天地に

三千世界の梅の花

これの使に選まずば

蜈蚣の姫の兩人が

何程秘術を盡すとも

直日に見直し聞き直し

加へて三人月の國

使となして遣はせよ

大黒主の神司

數限りなく確立し

此神業を完成し

言向和すか、さもなくば

神算鬼謀は胸にあり

照國別を正使とし

いかで思ひを達せんや

宣り直しつ、梅彦を

ハルナの都へ大神の

我胸中は早已に

服へ和す心算は

命令一下忽ちに

入岐大蛇や醜神を

根底の國へ追ひ落す

只願はくば梅彦の

二人の女神と諸共に

進ませ給へ 惟神

神に誓ひて乞ひまつる」

幾代姫は起ち上り

幾代姫「雄々しくも我脊の君の宣らすこと

許させ給へ百の司等。

願はくば幾代の姫も諸共に

ハルナの都へ行かまほしきよ。

照國の別の命と名を負ひし

我脊の君の勇ましきかな。

日の出別神の命に物申す

我等夫婦を印度に遣はせ。

東野別神の教の司等

我等夫婦の乞ひを許せよ。

時置師神の命も梅彦や

我願言を聞きし召しませ」

時置師神は歌もて答へた。

時置師

「汝が君のその言の葉は清けれ」

見合せ給へ夫婦の出立。

三五の神の使の夫婦連れ

神世も聞かぬ例なりせば」

幾代姫「神國を思ふ誠のあふれてぞ

いと恥かしき私の言靈。

いとさらば我脊の君を只一人

使はせ給へ印度の御國へ」

日の出別は答へて

日出別「照國の別の命は印度の國

いと雄々しくも進み行きますせ」

日の出別 命の宣示によつて茲に照國別は愈印度の國へ出張する事となつた。

(大正一一、一〇、二一、舊九、二、北村隆光録)

第三章 出

師 (二〇六八)

照國別の梅彦は日出別の教主より月の國のハルナの都へ向ふ事を許され、意氣揚々として座につき

照國別「有難し神の心に叶ひしか

月の國をば照國別と行く。

いささらばこれより我は幾代姫

やかたを清く後に守れよ」

幾代姫は歌ふ。

幾代姫「照國別の我夫は

日出別の教主より

月の御國に潜みたる

大黒主の神司

其外百の醜神を

尊き神の御教に

言向和し救ふべく

イソの館を立出で、

出でます事の雄々しさよ

妾は後に止まりて

神の教を守りつゝ

力限りに世の人を

皇大神の大道に

導き救ひまつりなむ

わが春の君よ一時も

早く館を立出で、

天地百の神人の

苦み悩む災を

洗はせ玉へ惟神

神の御前に願ぎまつる」

と歌ひ了るや、照國別は

出 師

照國別

「いざさらば曲津の運も月の國

頭ハルナの都へ行かん。

大黒の主命はさぞやさぞ

驚きやせむ此いでたちに。

入尋殿並びるませる司たち

われはこれより立わかれなん」

時置師神は立つて歌ふ。

時置師「照國の別命はよく行けよ

われは館に止まり守らむ」

これより黄龍姫、蜈蚣姫は日出別命の承諾を得、數多の司に讃嘆され乍ら、母子は

普通の旅人に身を變じ、フサの國を横斷し、フサの海より舟に乗りて、ハルナの都へ
進み行くこととなつた。又梅彦は直ちに宣傳使の服装を整へ、照公、國公、梅公の從
者と共に、河鹿峠をこね、フサの國を東南さして進み、月の國へ進む事となつた。

此時玉國別の音彦は立上つて、歌ひ出した。

玉國「三五教に仕へたる

玉國別の宣傳使

音に聞わし音彦は

フサの國をば宣傳し

海に泛びて自轉倒の

島に渡りて遠近と

神の教を宣べ乍ら

大江の山に立こもる

バラモン教の大棟梁

鬼雲彦や鬼熊別の

魔神に向つて言靈の

戦を開き曲神を

追ひ散らしたる強者ぞ

梅彦いかに勇あるも

此音彦に及ばんや

日出別の大教主

照國別を遣はして

大黒主の曲神を

言向和し玉はんこ

計り玉ふぞ愚かなれ

いかに神徳充實し

天地をゆるがす言靈を

身に受けゐるこ云ひ乍ら

敵にも鋭き刃あり

いかでかこれの大敵を

一人や二人の力にて

言向和し了せんや

此音彦の心中は

實に不安の雲掩ひ

前途を案じやられけり

あ、惟神々々

神の心に見直して

玉國別を今一人

遣はせ給へ真心を

こめてぞ祈り奉る

朝日は照る共曇る共

月は盈つ共虧くる共

假令大地は沈むとも

三五教の御教を

決して汚す事あらじ

月日の如く明けく

道の光を現はして

神の御前に復り言

申しますらん 惟神

早く許させ玉へかし

日出別
と歌を以て希望を述べた。日出別神は歌を以てこれに答ふ。

玉國の別の司は言靈の

清くいませば悩むことなし。

さり乍ら數限りなき安の國

只一柱にてせん術もなけむ。

玉國の別の司よ心して

曲津のすさぶ月へ出でませ。

月照の神命をあがめつ、

夜を日について進みませ君」

玉國別は欣然として立上り、又も歌にて答ふ。

玉國別「千早ふる神の光の現はれて

玉國別の玉も照りなん。

月照の神命の御光に

暗路を安く渡りてぞゆく。

イツ／＼にイツの館を立出で、

進む我こそ樂しかりけれ。

東野別、司の前に物申す

守らせ玉へ妻の身の上」

東野別はこれに答へて

東野別「五十子姫、清く雄々しくましますさば

音づれなくも安く行きませ。

素蓋鳴の神尊の愛娘

瑞の御靈とあれし君はも。

此君のこれの館にゐます限り

安く楽しく道は榮わむ。

村肝の心残さず印度の國

ハルナの都にぞく進みませ」

音彦は又歌ふ。

玉國別

「有難し心にかゝる雲もなく

傳へて行かむ印度の御國へ。

時置師神命よ日に月に

守らせ玉へこれの館を。

いとあらば並るる司に物申す

神のまに／＼別れて行かむ。

五十子姫玉國別が勇ましく

復言する日をこそまてよ」

五十子姫は歌ふ。

五十子「勇ましき我脊の君の御姿を

隠るゝまでに眺めぬかな。

村肝の心を残し玉はずに

神のまに／＼進みませ君」

玉國別は一同に向ひ會釋をし乍ら宣傳歌を歌ひつゝ、三人の隨行と共に、これ又河鹿峠をふみ越ね、フサの國の原野を涉りて、印度を指して進み行く事となつた。

治國別の龜彦は立上つて歌もて自分の希望を述べた。

治國別「神素盞鳴大神の
隠れ玉ひし伊弉諾

教司と現れませる
日出別に物申す

ウラルの道を奉じたる
醜の司の我れなれど

フサの海にて巡り會ひ
汝が命の訓陶を

受けて誠の人となり
名さへめでたき宣傳使

喜び勇んで四方の國
自轉倒島まで打渡り

醜の魔神を言向けて
再びこれの伊弉諾

皇大神に従ひて
功績を立てしわが身魂

見向きもやらぬ梅彦や
音彦一人を拔擢し

大黒主をいましめの
任務を依さし玉ひたり

あゝ恨めしやく
われも神の子神の宮

いかでか彼に劣らんや
直日に見直し聞直し

宣直しまし龜彦を
印度の御國へ使はして

入岐大蛇のかかりたる
醜の司を悉く

三五教の大道に
救ひ助くる神使ひ

任せさせ玉へ逸早く
神の御前に伺ひて

我言靈の神力を
照らさせ玉へ 惟神

菊子の姫と諸共に
謹み敬ひ祈ぎ奉る」

と歌ひ了つた。日出別命はこれに答へて

日出別

「勇ましき治國別の言あけを

心涼しく頼もしく思ふ。」

いざさらば汝が命は印度の國

すみぐく迄も巡り救へよ。

言靈の幸はふ國の神司

勝鬨あけて早歸りませ」

と歌もて印度の國への出陣を許した。治國別は勇み立ち、

治國別「かけ巻も綾に畏き皇大神の

御言のまゝに進み行かなん。

日出別神の命よ今しはし

我復言待たせ玉はれ。

東野別、司の前に物申す

百の司を恵み玉へよ。

われは今印度の國へ進みゆく

守らせ玉へ菊子の姫を。

残しおく妻命もつゝしみて

神の教を宣べ傳へせよ」

東野別は之に答へて、

東野別「みづくし益良武夫の龜彦は

名を萬世に傳へますらん。

千代八千代萬代までも龜彦が

治國別名を照らさむ。

治國の別命のいさをしを

仰ぎてぞ待つ唐土の空」

菊子姫は又歌ふ。

菊子姫

「げなげなる尊き便りを菊子姫

待つ間の永き鶴の首哉。

一步の歩みも心配らせつ

進み行きませ我脊の君は。

山を越わ荒野をわたり雨にぬれ

進み行く君見れば雄々しき」

初稚姫は立上り、金扇を開いて、自ら歌ひ自ら舞ひ、五人の神司が出陣を祝した。

初稚姫「久方の天津御空の限りなく 照り渡るなる三五の

月の教は四方の國 青人草や鳥獸

草の片葉に至る迄 惠の露に霑ひて

尊き神の御光を 仰ぎ楽しむ葦原の

入洲の國の其中に 如何なる神の仕組にや

取残されし印度の國 七千餘りの國々に

王と現れます刹帝利 入岐大蛇の醜靈に

惑はされつゝ日に月に よからぬ事のみ行ひつ

世は常暗となりて行く
道に仕ふる神司

時しもあれやバラモンの
大黒主が現はれて

ハルナの都を根據とし

バラモン族を庇護しつゝ

刹帝利族を押し込めて

暴威を揮ふぞうたてけれ

それに付いて毘舍首陀の

三種階級の民族も

バラモン族の暴虐に

苦み悶む國原は

怨嗟の聲にみちぐぬ

あゝ、惟神々々

神の御靈の幸はひて

神素盞鳴大神は

時を計らひ瑞御靈

發揮し玉ひて印度の國

ハルナの都へ三五の

神の司を遣はして

世人を救ひ玉はん

計り玉ひし尊さよ

日出別の教主より

此大業を命ぜられ

黄龍姫や蜈蚣姫

尊き司を始めとし

心も明き照國の

別命や玉國別

治國別の三柱を

おのもくにごま任けて

神の御爲世の爲に

遣はし玉ふぞ有難き

われも初稚姫神

年端も行かぬ身なれ共

神素盞鳴大神の

遣はし玉ひし八乙女が

清き御業に神倣ひ

大黒主の館まで

忍び参りて三五の

誠の道に曲神を

言向和させ玉へかし

神の司の御前に

父とあれます時置師

願を必ず許すべし

われを遣はし玉ひなば

我大神の御心を

時節を待つて大黒主を

神の御前に復言

許させ玉へ 惟神

日出別や東野別

謹み敬ひ祈ぎまつる

神の司は初稚が

神の御言の幸はひて

如何なる惱みも堪へ忍び

うまらにつばらに説きさとし

誠の道に言向けて

申し奉らんいざ早く

神の御前に祈ぎまつる」

と歌つて、自分も單獨にて、大黒主の館に忍び込み、曲神を歸順せしむべく、出陣を

許されん事を請願した。日出別は歌を以てこれに答ふ。

日出別「勇ましき初稚姫の言靈よ

聞く度毎に涙こぼるゝ。

さり乍ら初稚姫は獨り御子

いかでか印度に遣はすを得ん」

初稚姫はこれに答へて

初稚姫「いぶかしき日出別の言靈よ

神に捧げし我身ならずや。

時置師父の命も初稚が

姫の言葉を愛づるなるらん」

時置師神は歌もて答ふ。

時置師「天地の御靈にあれし我娘

神のまに／＼仕へまつれよ。

時置師、神の司は只一人

いでゆく汝を雄々しくぞ思ふ」

日出別命は又歌ふ。

日出別「勇ましき親子二人の心根を

神は喜び玉ふなるらん。

いざさらば初稚姫の神司

神のまに／＼進み行きませ。

東野別は立上りて歌ふ。

東野別「年若き初稚姫の御姿を

見るにつけても涙ぐまれつ。

さり乍ら尊き神の守ります

司にませば心痛めず。

いざ早く御言のまゝに出でまして

神の御前に返り言せよ」

初稚姫は嬉しげに又歌ふ。

初稚姫「日出別、東野別や垂乳根の

父の言葉に心勇みぬ。

有難き神の恵を受け乍ら

印度の御國へ進みゆかなむ」

かく歌ひて、一同に別れを告げ、飄然として只一人伴人をもつれず、萬里の山河を越えて印度の國へ進み行く。

神界の御經綸にて最初より印度の國のハルナの都に現はれたる大黒主を言向和す爲出張を命ぜらるべき神司は、略決定されてゐたのである。併し乍ら神素盞鳴大神は我娘の夫が三柱迄も加はり居る事にて、明さまに言ひ出でかね玉ひ、日出別神に命じて、相談會を開かせ、随意に此使に奉仕する事の手續をとられたのであつた。又初稚姫は神素盞鳴大神が八人の乙女を一柱も残らず、敵の牙城に使はし玉ひし尊き清き大御心に感激し、如何にもして、八人乙女の盡し玉ひたる如き神務に従事せばやと、時

の至るを待ちつゝあつたのである。時置師神の奎助も、初稚姫の健氣なる心に感じ、我子乍らも天晴れな者ぞと、ひそかに感涙に咽んでゐた。

斯くの如くにして愈印度の國の大黒主に對する言靈戰の準備は全く整うたのである。あゝ、惟神靈幸倍坐世。

(大正一一、一〇、二二、舊九、二、松村直澄録)

瑞 月

世の中の移らう状をながめては
立つべき時の來るを悟る

瑞月

天國の清き姿を移さん

朝夕勵む我ぞ樂しき

信徒は皆吾業わがわざに心して

世人のために努めはげめよ

世の人の譏りも如何で恐れんや

吾爲す業は神のおんため

第二篇 黄金清照

第四章 河 鹿 越 (一六九)

満目蕭條として何處もなくおちついた秋の空、四方の山邊は佐保姫の錦織なす金色の山野を、黄金姫、清照姫の二人は巡禮姿甲斐々々しく、河原峠の峻坂を、二本の杖にて叩き乍らエチ／＼登り行く。

黄金姫と云ふは神素盞鳴尊より新に名を賜はりたる蜈蚣姫のことである。又清照姫といふのは黄龍姫のことである。二人は岩に腰打かけ、息を休め、所々に圭角を現はした、まだらに禿た山の谷間を流る、激流を打眺め、斑鳩のここかしこ飛びまはる姿を眺めて旅情を慰めて居た。

清照「お母アさん、何と良い景色で御座いますな。ここは言依別命様が馬に乗りて烈

風に吹かれ、從者の玉彦楠彦、嚴彦、と共に此谷間に轉落し、人事不省となつて御座る間に、五十萬年未來の天國を探險せられたといふ有名な處で御座ります。春夏になるに河鹿の名所で、随分佳い聲が谷水の流れを壓して、此山上まで聞えて來る相です。急いで急がの旅ですから、ここでゆつくりと息を休めて參りませうか」

黄金「何を言うてもバラモン教やらウラル教の間者が、イソの館近傍へ澤山に出沒してるといふことだから、餘り油断はなりません。ゆつくりして居ては、豫定の所までに日が暮れると大變だから、ポツ／＼と行きませう。何程足が遅くても根に任せて行けば早いもの、何程急いで歩いてても、休息が長いと却て道がはかばかぬもの、サア行きませう」

と先に立つ。清照姫も母の言に否む由なく、杖を力に峻坂を登りつ下りつ、谷を幾つとなく涉りてフサの國の都を指して急ぎ行く。

一方は險しき禿山、一方は滾々たる激流ほとばしる谷川を眺めて、山の腰に鉢巻をしたやうに通じてゐる細い路の傍の岩に腰打掛け四五人の男が、此風景を眺めて雑談に耽つてゐる。此五人は兎熊別の部下の者で、ハム、イール、ヨセフ、レープ、タールの五人であつた。

ハム「吾々は今年で足かけ三年、斯うして此附近を捜しまはつてゐるのだが、何を言ふても廣い世界、蜈蚣姫の所在が分る筈はないぢやないか、人相書を何程持つてゐても、十年前の姿と今とは餘程違つてゐるに相違ない、又一度でも、今迄に會うて居ればどこかに覺わがあるんだけれど、少しく顔が四角いの、目が大きい、丈が通常だのと此位のことでは到底見當がつかない。兎も角婆アさんと見たら、小口から

引どらまへて面の検査を、これからはすることにせうかい。蜈蚣姫様を發見しさへすれば、それこそ大したものだから……」

イーアル「蜈蚣姫様は三五教へ沈没したといふぢやないか。一層のこと三五教の靈場々々へ化け込んで考へて見たら、それが一番早道かも知れんぞ」

ハム「何程早道だつて、そう敵の中へ易々と這入れるものか。三五教には天眼通とかいつて、すぐに吾々の行動を前知する法があるから、迂濶は近寄れない。ここはイソ館の近くだから、三五教の宣傳使が比較的澤山通る。時節を待つてをれば、蜈蚣姫様がお通りになるかも知れないからな。まづあわてず急がず、かうして手當を貰つて日を暮してさへ居れば安全ぢやないか」

イーアル「それだと云つて、足掛け三年も何の手掛りも得ず、手當ばかり貰つて居るのは何とかなしに氣の毒のやうな氣になつて来る。つひには無能呼ばはりをして免職の憂目に會ふかも知れないぞ。そうなつたら俺等ばかりの難儀ぢやない。妻子眷族迄が忽ち路頭に迷はねばならぬ破目に陥るから、第一それが恐ろしいぢやないか。大黒主の大教主に次いで鬼熊別様が、あの勢ひであり乍ら、肝腎の奥様や娘が行きはが知れず、と云ふてあゝ云ふ氣の固いお方だから、大黒主の様に大切な奥様を放り出して、奇麗な女を本妻にしたり、妾を澤山置いて、ひそかに戯れるといふやうな不仕末なことはなさらんのだから、實際聞いても氣の毒なものだ。吾々は信者で居乍ら、結構な手當を鬼熊別様から頂いて居るのだから、早くお尋ね致して、夫婦和合して御神業に参加なさるやうにして上げねばならぬぞ」

ハム「鬼熊別様は信仰の強い神様だから、何事も一切を惟神にお任せ遊ばし、妻子の

「ここなごはチツとも氣にかけてゐられない。只神様にお任せしておけば良いのだ。日夜品行を慎んで、信仰一味に入り、吾々に誠の二本をお見せ下さる救世主のやうな方だが、大將の大黒主様の此頃は嫌疑がかつて大變な御迷惑、ハルナの城へは御出仕も欠勤障だといふことだ」

イーブル「大きな聲では言はれんが、俺達は、大黒主のやうな放埒不羈の方を教主と仰ぐよりも、鬼熊別様の我主人を教主と仰ぐ方が餘程心持が良いワ。お二人の人氣といふものは大變な相違ぢや。なぜあれ程に人氣の悪い大黒主が、存振を利かしてゐるのだらうかなア」

ハム「何と云つても、勢力に壓倒さるゝ世の中だから、仕方がない。誠一つの教を信ぶるバラモン教の本城でさへも、勢力といふ奴には如何しても勝つことが出来ない」と

「見る。鬼熊別の奥様やお一人のお娘の小糸姫様が三五教へ降服されたといふことだが、大黒主の大將の耳に入り、それから大黒主が鬼熊別に對して猜疑の眼を光らし、妻子の行方を捜し出して、それをバラモン教に心の底から歸順せしめなければならぬ。そうでなければ二心に定つてゐると、氣の毒にも無理難題を仰せられるのだから、俺達の大將様も本當に御迷惑千萬な事だ。云ふに云はれぬ御苦みだらう」

レープ「オイあすこに何だか人影が見ゆるぢやないか。ソロ／＼此方へ近寄つて来るやうだ。暫く沈黙して此林の中に隠れる事とせうかい。彼奴は三五教の奴かも知れんぞ」

タール「あのスタイルルから見ると、巡禮のやうだが、さうやら女らしい」

ハム「若しもあれが女であつたら、イヤ婆アであつたら、誰でも溝はんからフン縛つて

印度の國迄連れ歸り、吾々が安閑として手當を頂いて遊んでゐるのぢやないといふ
ことを見せやうぢやないか。そんなことせなくては申譯がないからな」

イーノ「はる／＼と偽物を連れ歸つた所で、肝腎の鬼熊別様が一目御覽になつたらすぐ
に分るぢやないか。「貴様は餘程バカな奴だ」とお目玉を頂戴する丈のことだ、そ
んな偽物を伴れて歸つた所で、骨折損の疲もうけた、分らん代物は相手にならぬ
方が安全でいいぞ」

ハム「素より吾々は身分の賤しき者で、蜈蚣姫様や小糸姫様のお顔を知らないのだから
婆アや娘を見つけたら、これに違ないと思ひましたといつて伴れ歸りさへすれば、
假令違つた所で温厚篤實な鬼熊別様は、ソラそうだらう。見違へるも無理はない。
こんな簡単な人相書だから……そして大變に年が老つて人相も變つてゐるだらうから

と仰有つて、見直し聞直し反對にお褒めの言葉を頂いて、又此役を永らく任じて貰
ふやうになるかも知れないぞ。兎も角熱心振をあらはさねば吾々の役がすむまい。
イヤ責任が果せないからなア」

レープ「オイ／＼其處へ近付いて來たぞ。サア隠れた／＼」
と云ひ乍ら、道端の灌木の茂みに姿を隠して了つた。

親子二人の巡禮は五人が此處に潜むとは知らず、風景の佳き谷川を眺め乍ら、ツビ
立止まり、

清照「お母アさん、河鹿峠は天下の絶景だと聞きましたが、本當に勇壯な谷川の流れ錦
の様な山の色、秋は殊更美しく、丸でお母アさんの名の様な黄金色で、天國を旅行
してゐるやうな氣になりましたなア。イソの御館も随分結構な所ですが、此風景に

比ぶれば側へもよれません」

黄金

「本當に美しい景色だ。春は花が咲き、鳥は歌ひ青芽はふき、そこら中が何と

なしにみづくしうて、一層眺めが宜しからうが、秋の眺めも亦格別なものだ。併し乍らかうして秋の錦を見てゐる内に、又もや冷い風が吹いて、何の木も此木も常磐木を除く外は、羽衣を脱いだ枯木のやうになつて了うんだから、人生といふものは實に果敢ないものだ。私も追々三年が老つて、さうやら羽衣を脱いだ木の様になつて何ともなしに心淋しくなりました。お前はまだ鶯の花の蕾、早く良い夫を持つたせて私も早く安心したいものだが、まだ神様の御許しがないと見えます。今度の使命を果して、早くよい夫を持たせ、楽しい家庭を作り、私も亦夫に巡り合つて、夫婦同じ道で暮りたいものだ。何とした私も因果な者だらう。現在夫はあり乍ら、

信仰が違つて爲に、今は夫の所在は分つて居つても名乗つて行く譯にもゆかず、若い時は何とも思はなかつたが、斯う年が老ると、夫のことが思ひ出さる、」

と聲を曇らせ、涙ぐんで語る。清照姫は

清照

「お母アさん、御心配なされますな、私はまだ一年が若い身の上、そう慌て夫を持つにも及びますまい。併し乍ら廣大無邊の神様の御恵みに依つて、キツと御両親様が御面會遊ばし、同じ三五の道にお仕へ遊ばすやうになりませう」

斯く話す折しも、ガサ／＼と木を揺つて、現はれ出でた五人の男、細き山腹の路に立はだかり、

ハム「お前は今聞いて居れば、何でも神の道を開きに歩いてゐる者らしいが、一体何處の者だ。そして姓名は何といふか」

と威丈高に腕をはつて、頭押さへに問ひかける。

黄金「私は……お前も最前性の悪い、ここで隠れて聞いただが、此世を黄金世界に立直す黄金姫といふ者だ。何だかエライ権幕で私の姓名を尋ねるに付いては仔細があらう」

ハム「あらいでか、貴様は黄金姫と吐すからは、聖地エルサレムの奴だらう、黄金山の下にあつて三五教を開いて居つた、埴安姫だな。オイ皆の者、最前もいふ通り、俺達も御大將に土産がないから、此奴を一つふん縛つて、はるくミフサの海迄かつぎ出し、御館へ連れ歸ることにせうぢやないか」

一同「ヨシ、併しもう少し様子を探つてからにしたら如何だ。もしもレコだつたら大變だぞ」

と稍躊躇してゐる。黄金姫は

黄金「ホ、、、お前は山賊だないか。大方此邊に岩窟があるのだらう。同じ人間に生れ乍ら、往來の旅人をおごかして、渡世をするとは實に憐れな者だ。私は三五教の信者だが、一つ話をしてあげるから、トックリとそこで聞きなさい」

ハム「オイ皆の奴、此奴ア中々手ごわい奴だ、レコではないと云ふことは今の言葉で判然した。サアかかれ一イニウ三ツ」

と號令をする。清照姫は笠を被つたまゝ、

清照「コレ盲碌さん、女ばかりと侮つて、いらぬチョツカイを出すと、キツイ目に會はされますよ。此物騒な山坂を僅かに二人の女で通る位だから、腕に覺がなくては叶はぬこと、美事相手になるなら、なつて見たがよからう」

ハム「コリヤ失敬千萬な。俺達を泥棒とは何だ。汝こそ太奴だ、泥棒の親方だらう。何程親分でも駄目だぞ。こちらは屈強盛りの男が五人、そちらは老ぼれ婆アに小娘そんな負惜みを吐すより、神妙に俺達の言ふやうにしたらさうだ。騒ぎさへせねば別にひつ括りもせず、よい所へ連れて行つてやる、返答はさうだ」

と睨めつける。黄金姫は泰然自若として、

黄金「オッホ、蚊トンボのやうな腕を振まはして何寝言をいつてるのだ。斑鳩が笑つてゐるぞ。サア清照姫、こんな胡麻の蟬みたやうな奴に相手になつてる暇がない度し難き代物だ。それよりも早く靈に飢ゑ渴いた神の御子を一人でも救ひつ、目的地へ参りませう」

と娘を促し、通り過ぎやうとするのを、ハムは

ハム「サアかかれッ」

と命令をする。両方から兩人目がけて、武者振りつくのを「エー面倒」とハム、イーの兩人を黄金姫は苦もなく谷底へ投げ込んで了つた。ヨセフは清照姫の細腕に首筋をグツと握られ、これ又眼下の青淵へ目がけて、空中を三四回、回轉し乍らザンブとばかりに落込んだ。

之を眺めたレーブ、タールの兩人は一目散にかけ出し、三人が投げ込まれた谷川に辿りつき、三人を救はん焦れ共、板を立てたる如き大岩壁、近よることも出来ず、十町ばかり下手へ逃げ行き、漸くにして蔓なきにつかまつて谷川に下り、流れを傳うて、三人が落込んだ青淵を尋ねて上つて行く。

黄金姫、清照姫は委細構はず、宣傳歌を歌ひ乍ら、倉皇として峠を東南へ下りゆく

のであつた。

(大正一一・一〇、一二、舊九、三、松村真澄録)

瑞月

幾年か見ねぬ大空の彗星も

地變の前に明く顯はる

身も魂も囚わられたる吾なれど

心は廣し天國の春

第五章 人の心 (一〇七〇)

レープ、タールの兩人は三人の同役が二人の女に脆くも谷底に、とつて放られたるに肝を潰し、十町ばかり逃げのび、そこより漸くにして谷川に下り三人を救ふべく岩を飛び越へ浅瀬を渡り、漸くにして五六丁ばかり上りつめた。

レープ「オイ、タール、ひきい奴が現はれたものじゃないか。ハムの大將、女小供と侮つて、思はぬ不覺をとりよつて……あの態……俺や女の天狗かと思つたよ」

タール「随分肝玉の太い巡禮じゃないか。あの口のき、様と云ひ、武術の鍛錬してる事と云ひ、こりや一通りの女じゃあるまいぞ。天狗じゃあるまいけき聞けば三五教の信者と云つて居つたから、是から女に出會つても輕々しく相手にはなれないぞ。然し三人

の奴はうまく助かつて居るだらうかな。俺はそれ計りが案じられて仕方がないわ」
レープ「落ちた處で直様、谷川へ顛落して頭を打つて云ふ事もあるまい。これだけ谷を
塞ぐ位木が茂つてるのだから、何れ途中で木にかかつて居る者もあらうし三人が三
人迄谷川に落ちて死んでゐるやうな事もあるまい。然しハムの大將、ありや屹度神
罰が當つたに違ひないぞ。平生からの心掛が悪いからな。もしまだ虫の息でもあつ
たら助けちやならないぞ。イール、ヨセフの二人を前に助けて彼奴あ、後まはしに
して放つて置いて置かうかい」

タール「さうだなあ、それでも宜いわ。然しあの女は随分素敵な者だつたな。あんなナ
イスを女房にもつたら男子としては仲々の光榮だぜ」

レープ「そんな陽氣な事を云ふてる場合じやあるまい。さあ早く三人の所在を探して何

とかせなくてはなるまい。愚圖々々して、こんな谷底で日を暮したら、それこそ大
變だ。獅子、狼や大蛇の餌食にしられて了ふぞ。サア行かう」
と先に立つて、色々工夫し乍ら谷川を傳ひ上り行く。

二人は漸くにして三人の投げ込まれた谷底へ辿りつき、四邊を見渡せば不思議にも
岩と岩との間の真砂の上に半分ばかりグサミ體を埋めて横たはつて居る。

レープ「何ぞ不思議な投げられやうじやないか。これだけ深山な岩石があるのに三人が
三人とも都合よく真綿の様な真砂の中にグツと投げ込まれ、安閑と眠つて居やがる
投げられるものも仲々氣が利いて居るが投げたものも仲々氣が利いて居るなあ」

タール「オイ、そんな事あ、後でゆつくり話す事にして早く水でも興へて呼び生かさん
事にや、サツパリ駄目だぞ。然し約束の通りハムだけは助けん事にしやうかな。一

層の事、今の内に川に投げ込んで此儘水葬してやつたら面倒が残らなくて宜いぞ」

レープ「まづ俺はヨセフを介抱するからお前はイールの方を介抱してやれ。魂返して遠く肉体を離れた靈魂を元の肉体へヨセフと云ふ段取だ。タールお前は一日出た魂を元の體へ易々といゝ様にするんだぞ。ハムは谷川へ流して置けば、うまく、くたばり大きな魚が出て来て頭からハムだらう。アハ、、、」

と云ひ乍ら二人はヨセフ、イールを捉へて人工呼吸を施してゐる。一時ばかり經つて漸くフウ／＼と息を吹き出しウーンと云ひかけた。

レープ「さア、しめた。もう二人は大丈夫だ。ハムの奴、態ア見やがれ。此奴ア後まはし處か、日頃の行ひが悪く憎まれてゐるものだから、斯う云ふ時には誰も助け手がない。神さんだつて素知らぬ顔してゐるからな。人間と云ふものは憎まれん様にせ

なくてはいかんぞ。人は一人で立つ事は出来ぬ者だ。持ちつ、持たれつ、お互に助け會ふて渡る世の中だ。渡る浮世に鬼がないと云ふが此ハムは俺達同僚にでも憎まれて居やがるから、此奴ア本當の人鬼だ。鬼が冥土に行つて鬼に苛責されるのも面白からう。ウフ、、、」

ハムはウン／＼と呻り出した。

レープ「やア、此奴は放つていても勝手に生き返り上るぞ。憎まれ子は世に綱張る……と云つて惡運の強い奴じやな。今の中に放り込め／＼。そうせにや俺達の頭の上る時節がないぞ」

タール「そんな者にかゝつて居つたら、此處迄折角人工呼吸したものが中途に駄目になつて了ふわ」

レーブ「それもさうだ。俺達二人は今此手を止める譯には行かず、さうだと言つて放つて置けばハムの奴、だん／＼生き返るなり、も一人、連が欲しうなつた。これだから人間は共同生活の動物と云ふのだ」

ハムはウン／＼と大きく呻り、

ハム「レ、、、レーブ、タ、、、タール、其様な無禮な事を吐すと罰があタールぞよ。

ウフ、、、」

レーブ「やア、此奴ア大變だ。生き返りやがつたな。おい、タール、早く罫をつけんと取返しをつかん事が出来るぞ」

タール「うん」

ハム「こらく、其手をゆるめたが最後二人の生命は助からないぞ。貴様の最前からの

話は一伍一什残らず聞いて居たのだ。憎まれ子のハムが、も一つ覇張つてやらうか
レーブ、タールの小童子共、ハムさんが一つ水葬をしてやるから、さう思へ。イヒ
、、、」

レーブ、タールは吃驚して、

「やア、此奴ア大變だ」

と一目散に二人を其場に捨て、谷川を傳ひ／＼逃げ出す。ハムはムツクと起き上り、
ハム「アツハ、、、人間の心と云ふものは分らぬものだ。レーブ、タールの二人の奴、
俺が死んだと思ひやがつて、口を極めて嘲弄し、助けよまいとして相談をしてゐや
がつたが、天罰と云ふものは恐ろしいもんだ。何は兎もあれ、イール、ヨセフの兩
人を助けてやらねばなるまい」

と云ひ乍ら谷水を掬ひ口に含ませ、一生懸命に介抱して居る。けれども兩人は容易に息を吹き返しさうにもない。

斯かる處へ谷の木御を響かして宣傳歌が聞えて來た。

「神が表に現はれて 善神邪神を立て別ける

此世を造りし神直日 心も廣き大直日

直日に見直し聞き直し 天ケ下には鬼もなく

醜女探女もなき迄に 言向和し治め行く

神素盞鳴大神の 守らせ給ふ三五の

神の教の宣傳使 大黒主に憑りたる

入岐大蛇を言向けて 誠の道に救ひ上げ

世界に名高き印度の國

光り輝く天津日の

高天原の樂園と

立て直さんと出で、行く

我は照國別の神

鬼雲彦や其外の

猛き魔神も言靈の

伊吹に拂ひ清めなば

如何に強者多くとも

朝日に露の消ゆる如

悪魔は忽ち退散し

心の空を寒きたる

村雲ここに吹き散りて

名詮自稱の月の國

月照彦の御守りと

治まり行くは目のあたり

あゝ、惟神々々

神の御靈を輝かし

三五教の神力を

天地四方に擴充し

天津御國へ復り言

朝日は照ることも曇ることも

假令大地は沈むことも

七千餘國に蟠まる

誠一つの三五の

救ひ助くる天の道

照公、梅公、國公よ

假令悪魔の現はれて

深き谷間に落すことも

如何でか魔神を恐れんや

白さん事の樂しさよ

月は盈つことも虧くることも

大黒主は強くとも

魔神の数は多くとも

教に苦もなく言回けて

進めよ進めいざ進め

神は我等と俱にあり

暴威を揮ひ入千尋の

神の守りのある限り

死すべき時の來りなば

疊の上に居ることも

皇大神の御心に

一日も長く世の爲めに

水火の中を潜ることも

あゝ、惟神々々

河鹿峠の此景色

錦織なす佐保姫の

撫でさせ給ふ風の袖

悪魔を拂ふ神の水火

吹き拂ひ行く嵐風

人の心

必ず死るものぞかし

叶ひまつりし其上は

召し使はんと思召し

必ず救はせ給ふべし

御靈幸ひませよ

蒔繪の如く美はしく

袖ふりはへて我顔を

今吹く風は神の風

勢ひ強き曲神を

あゝ面白しく

心の駒に鞭撻ちて

一日も早くフサの國

月の國をば横斷し

枉の岩を悉く

言向和して月の國

一大都會と聞わたる

ハルナの都に立ち向ひ

大黒主を初めとし

鬼熊別の醜司

言向和さん樂しさよ

あゝ 惟神々々

御靈幸ひませせよ

此聲、耳に入るに共に谷底に二人の介抱して居たハムは、忽ち顔色を失ひ

ハム「やア、これや大變だ。最前の女の身内の奴が應援に來よつたのだ。愚圖々々しては居られない。二人の生命も大變だが俺の生命が肝腎だ」

と云ひ乍ら、又もや谷川を岩を飛び越ね淺瀬を渡り猿の如く渡つて行く。山腹の谷道

から照公はフツと此姿を眺め、

照公「もし、宣傳使様、此谷底に妙な奴が今走つて居ます。あれ御覽なさい」

と指す。照國別は

照國「何、人が此谷底に」

と云ひ乍ら、よくよく見下せば顔から血を垂らし乍ら猿の如く一人の男が駆け出すのが、ありくく見ゆる。

照公「もし、此谷底に何か大慘劇が演ぜられて居るのじやありませんまいか。合點の行か

ぬあの男の様子、一つ谷底へ下りて調べて見やうじやありませんか」

照國「うん、調べて見やうかな」

國公「おい、照公、此斷岩絶壁を如何して下りる積りだ。三間や五間の處なら空中滑走

してども着陸を無事にする事が出来やうが、斯う深い谷底では如何にもする事が出来んじやないか」

照公 「うん、さうだなあ。然し彼處まであの男も行つたのだから、何處かに道があるだらう。先づ宣傳使様にお任せして、調べよと仰有るなら調べるなり、もう止せと云はるれば止しにするのだ。俺達は宣傳使様の命令通りにして居れば落度はないからな」

梅公 「もし宣傳使様、あまり深い谷底でハッキリは分かりませんが、如何やら二人の人が殺されてる様です。大方今逃げた奴が殺して逃げたのでせう」

照國 「如何にも怪しい。何とかして様子を探つて見やうかな」

(大正一一、一〇、二二、舊九、三、北村隆光録)

瑞 月

西の峰にかくるゝ見れし月影は

かくれしにあらす常世てるため

散るゝてもちりしにあらす寒きため

またくるはるの春こそまで

第六章 妖

霧（二〇七一）

谷路の傍のコンモリとした森に古ぼけた一つの祠がある。其後にヒソク話をし
てゐる二人の男があつた。

「オイ、レーブ、今日位怖い目に會ふた事はないぢやないか、イヤ怪体な日はある
まい、バラかバンディーか芍薬か云ふやうな美しいクキン様が婆アと二人連れで河
鹿峠を天降り遊ばしたので、俺は一目其お姿を拜むなり、魂が宙に飛び、假令敵で
も構はぬ、一べんあの奇麗な手で、三人の奴のやうにさわつて貰ひたかつたが、併
し乍らあんな目に會つても約らないし、一体あれは何神さまだらう、俺はそれから
こつちといふものは、あの女神の姿が目にもちらついて、如何にもかうにも仕方がな

いワ。怖いやうな嬉しやうな何とも言へぬ気分になつて来たよ」

レーブ 「貴様も餘程良いデレ助だな。そんなこつて大切な使命が勤まるか。もし貴様、
あれが例のレコであつたら、如何する積だ」

タール 「そんな事は先にならな分らぬワイ。兎も角粹の利かぬ奴計りがゴラついてるも
んだから、施すべき手段がない。併し三人の奴は假令命はなくなつても光榮だと思
うて、成佛するだらう。あんな高い所からウンと一思ひに天國へ行けるのならば、
おれもあの女神に放つて貰うて、天國へ行つた方が何程結構だか知れない。實際此
世の中に居つたつて面白くも何ともないからなア」

レーブ 「それ程死にたいのなら、なぜハムが追ひかけた時に殺して貰はなんだのだ。ヤ
ツバリ貴様は命が借いのだらう」

タール「馬鹿言ふな。貴様が逃げるもんだから朋友の義務を重んじて、附合に逃げてやつたのだ。何程天國がよいと云つても、ハムのやうな奴に殺されてはたまらんからな。たつた一べんより死ぬ事の出来ぬ命を、アテーナの女神の様なクキン様の御手に掛つて死ぬのならば死んでも冥するが、ゲジ／＼のやうに世間から厭がられてる鬼面のハムの手にかゝることア、何程死に好の俺だつて眞平御免蒙りたいワイ。ア
ーアま一度女神の御顔が拜みたくなつて来たわい」

レープ「婆アさんの御顔は如何だ。萬々一あのクキンさんがお前の女房になつてやること仰有つたら、婆アさんもキツとお添物に出て来るに違ないが、其時にや貴様如何する積だ」

タール「婆アさんだつて女だよ、あんな娘を生んだ位だから、若い時は非常なナイスに違ない。昔のナイスだと思へば、餘り気分も悪いことアない事はないワイ。ウツフ、ハ、ハ、」

レープ「コリヤ静にせい。ハムの奴、聲を聞つけてやつて来やがつたら、それこそ大變だぞ。俺の命を今度は取るに違ない、餘り兩人が云ひすぎたからなア、大變に怒つてけつかるに違ないから、マア暫く沈黙の幕をおろして、潜航艇のやうに祠の床下にでも伏艇して居ろうぢやないか」

かゝる所へ足音高くスー／＼と息をはづませ乍ら、やつて来たのはハムであつた。ハムは祠の前の置石に腰を打かけて獨言をいつてる。

ハム「アア、何といふ今日は怪体な日だらう。天女のやうなナイスがやつて来やがつて、無限の力をあらはし、おれたち三人を猫が蛙を喰へたやうに、ポイと谷底へ投

ゆこみ、サツサと行つて了がった。空中を七八回も廻轉したと思へば、真綿のやうな砂の上へドスンと落され、暫くは氣が遠くなつてゐたが、漸くにして氣が付き起上らうとすれ共、腰の骨が如何なりよつたか、チーツとも動けないので自然療治を待つてゐると、そこへレーブ、タールの無情漢奴がやつて來やがつて、俺を水葬するの、二人を助けてやるのと、吐いてゐやがる。怪しからぬ事を吐す奴と腹が立つて堪らず、腰の痛みも打忘れて起き上るや否や、二人の奴ア、雲を霞と逃けて了ひよつた。モウ大分に行きよつただらう、イール、ヨセフの兩人をまだ温みがあるので、生き返らしてやらうと思ひ、いろく介抱してると、何とも知れぬ腹を扶るやうな聲で、宣傳歌を歌うて來る奴がある。此奴ア、キツと最前の母子の者の身内に違ない、グツ／＼してると大變と漸／＼此處までやつて來たが又もや腰が痛み

一步も歩けぬやうになつて了つた。ヤレ嬉しやと氣がゆるんだか口計り達者で身体がサツバリ動かぬやうになつて了つた。あ、如何したら良からうかな、もしや最前の宣傳使がやつて來よつたら、又候谷底へ放られて今度こそ命の終末だ。アア、バラモン教の大神様、私はお道の爲にやつた事でムいますから、假令少々不調法がムいましても廣き心に見直して此足腰を早く立て、下さいませ、御願致します」と涙聲になつて祈り出した。レーブ、タールの二人は祠の床下から此獨言をスツカリ聞いて了ひ、互に舌を出してニタツと笑ひ、何か肯き合つてゐる。

俄に河鹿川の谷底から濛々として灰色の霧が立昇り、あたりを包んで了つた。最早一足先も見えなくなつた。二人はこれ幸ひと祠の床下から這ひ出した。

ハムは苦痛益々烈しくなつたと見え、ウン／＼と唸り出し、終には

ハム「あ、苦しい〜」

と身をもがく様子が、霧を通してボンヤリと見わたて来た。ハムは二人のここに居ることには夢にも知らなかつた。只宣傳使の一行が追ひかけて来はせまいかと、そのみが恐ろしくて震うてゐたのである。

レーブは婆アの作り聲になつて、

レーブ「此祠の前に卑怯未練にも、八尺の男が吠わ面をかわき、何をグツ〜といつてゐるのだ。わしは河鹿峠でお前を谷底へ放り込んだ黄金姫だよ。モウ今頃は十萬億士の旅をしてゐるかと思つたに、またこんな所へ迷うて来たのか、ヨモヤ幽霊ではあるまい。蛇の生殺しにしておいてはハムも可哀相だから、スツバリと殺してやらねばなるまい。ここに尖つた岩がある。コレ清照姫、お前と二人で、彼奴の徳

利を叩きわつてやりませうか、酒の代りに赤い血が出るだらうから、それを酒の代りに呑んでみたら随分甘からう、大分永らく人間の血を吸はなかつたが、大變良い得物ぢや、かうして黄金姫と化けて居るのも随分辛いものぢや、あ、神さまは結構な御食を與へて下さる、臀部あたりは随分ポツテリと肉がついて居るから、スキ焼にして食へば大變に味が良いのだけれ、何を云ふても道中の事だから、此刀で一片〜ゑぐつて生で食うた方が味がよからうぞや。オッホ、〜、」

タールは若い女子の聲で

タール「お母アさん、本當にお腹が空いて、此鬼娘も困つて居りました。これも全く鬼雲彦様の大黒主が與へて下さつたのでせう。今日で三年も蜈蚣姫さま、小糸姫さまの所在を尋ねると云つて、手當計りをポツタくり、チツとも目ざましい仕事を致さ

なので罰が當り、鬼雲彦さまが、キツと吾々母子に久しぶりで與へて下さつたのでせう。さうもグリ／＼した厭らしい目玉だから、あの目から先ねぐり出してやりませうか、ホッホ、。何と甘さうな匂ひが致しますこと、鬼も時々こんな事がなければやり切れませぬワ。イツヒ、。』

霧に包まれて聲のみより聞えぬので、ハムは以前の母子はヤツバリ鬼であつたか、コリヤたまらぬ……と逃げ出さうとすれ共、腰はいたみ、足は萎ね、ビクとも動かない。さう／＼ハムは泣聲を出して

ハム「モシ／＼鬼の母子様、さうぞ今日計りは借い命をお助け下さりませ。私は鬼雲彦さまの家來でムいます。秋のやうな者をおあがりになつては、却てあなたの罪になり、鬼雲彦さまから御谷めの程も恐ろしくムいませう。味方が味方を食ふといふ事

はあり得可らざる所、さうぞ今日の所は御無禮をお赦し下さいまして、命計りは御助けを願ひます」

タール「ホッホ、。あのハムの白々しい言葉、これ鬼婆アさん、何事も耳をふたして食つてやりませうか。鬼雲彦さんだつて、こんな所までお目が届く道理もなし、頭からスツカリ食つて、雪隠で饅頭食つたやうな顔さへして居ればメツタに分りはしませぬ。幸ひ山中の事にて誰一人見て居る鬼もなし、こんな機會はありません、あゝモウたまらぬ／＼、何ともいへぬ甘さうな人の匂ひだ。なア鬼婆アさん、グツグツしてゐると、三五教の宣傳使が來たら大變です」

ハムはあわて、

ハム「モシ／＼鬼婆アさんに鬼娘さん、そりや餘りお胴慾ぢや。味方が味方を殺すとい

「ふやうな事がどこにありますか。私はバラモン教同士のよしみで助けて下さいな」
タール「ホッホ、、鬼婆アさん、あれをお聞きなさいませ。あんな勝手な事を言ひます、味方の中にも敵があるというぢやありませんか。此ハムといふ奴、味方の中の敵ですから、何の用捨もいりません、分つた所で御褒美こそ頂け、鬼雲彦さまからお叱言を頂く氣遣はありませぬ、此奴の同類にレーブ、タールと云ふ奴があつて、最前婆アさんと私と二人して谷底へほり込んでやつたイー、ヨセフ等三人の命を助けにはるく、谷底へ尋ね行き、同じ味方であり乍ら此ハム丈は悪人だから助けやらぬ方がよからう、憎まれ子世にはばると云つて、さうにもかうにも仕方ない奴だ、現に此奴の部下でさへも言つてゐた位だから、喰つた所でメツタに罰は當りませぬ、のうレーブよ……オットドツコイ鬼婆アさん」

レーブ「コリヤ心得て物を云はんかい、ハム公の奴、悟りやがつたら、折角の狂言が水の泡になるぢやないか」

タール「ナアニ悟つたつて構うものか、ハムは足腰が立たんのだから、鬼婆でなくても鬼娘でなくても、あの一升徳利をカチわつて、生血を絞り出し、ケツ肉でも食うてやれば良いのだ。サア、早い御得だ、グヅグヅしてると、三五教の宣傳使にでも見つかつたら大變だぞ」

ハム「モシ、鬼婆アさん、鬼娘さん、そんなレーブやタールに化けたつて駄目です。私はそんな事に騙されるやうな善人では無いませぬ、悪人でも無いませぬワイ。さうぞ今日丈は氣よう見のがして下さいな、これ丈腰の立たぬやうな者を自由にするのなら、三つ子でも致しますぞや。弱味をつけ込んでそんな事をなさると、鬼婆

アさん活券が下ります、モット負債みの強い代物の、レーブ、タールが今此先逃げましたから、彼奴は私と違つて肉付もよし血も澤山ムいます。さうぞ今日は彼奴をきこしめし、私は親の命日だから許して下さい。冥土に御座る父母がこれ文歎く事が知れませぬ。アン／＼／＼オン／＼／＼」

と狼のやうに泣き出した。

レーブ「其レーブ、タールといふ奴は貴様よりは善人か悪人か、それを聞かして呉れ」

ハム「ハイ／＼聞かせます共、私は只職務忠實に部下を厳しく使ひますもんだから、悪人にしられて居るのです。そして地位が高いもんですから、猜疑心を起して、何とにかんとか悪評を立てられてるので、決して世間に言うてるやうな悪人ぢやありません。あなたも鬼さんなら、よく私の腹の底が分りませう。善人面をして歩

てる奴にロクな奴ア、今の時節にやムりませぬ。レーブ、タールの如きは、實に現代思潮の悪方面を遺憾なく具備した奴ですから、まだ遠くも行きますまい。此先あたりにはマゴついてるに違ないから、彼奴を一カブリカブつてやつて下さい。そすりや鬼さんのお役目もつとまり、此世の中から悪の断片が取除かれるといふもの、私のやうな腰拔のシナびた善人は駄目ですよ。さうぞなる事ならば、レーブ、タールを追つかけて下さい」

レーブ「此鬼婆アは悪人は骨がこわいから嫌だ、お前のやうな善人が喰ひたくて搜してゐたのだよ。人間を取つて食はうと思へば、世界に濱の真砂ほゝあるが、食て味のない善人がないから、かうして母子の鬼がひもじい腹を抱けてそこら中をワロつてゐるのだ。善人さきけばさうしても喰はずに居られぬ、コレ鬼娘今日は何といふ

吉日だらう』

タール「本當に鬼婆アさんの仰有る通り、こんな嬉しい事はムいませんワ。善人の少い世の中にハムのやうな善人が見つかつたのは、掃溜を捜してダイヤモンドを拾つたやうなもんだ。これを喰はいで何を食ひませう』

ハム「モシく私の言ひ違でムいます。ハムは天下一品の悪人です。本當の善人といつたら、タール、レーブの兩人でムいます。最前お前さんが、ハム、イー、ヨセフの三人を谷底へ投げ込みなされた時、三人の者はすでにこゝ切れんとする所、危険を冒して、あの谷川を渡り、御親切に三人を助けてやらうとした大善人でムいますから、キツと血の味もよく、たべ具合が宜しいに違はありませぬ。善人が味がよければ彼兩人に限ります。私のやうな者をおあがりになつても砂をかむや

うなもんですから、さうぞこんなガラクタに目をくれず、天下一品の彼等善人を早く追つかけなさいませ。グヅくしてるとさつかへ沈没して了ひます』

レーブ「此鬼婆アは時々虫が變つて、刹那々に氣の持方が違つて来る。最前は善人が喰ひたいと思つたが、餘り齒ごたへがないから、一つ天下一品の悪人たるお前が喰つてみたいのだ。サア覺悟をしたがよからう、お念佛でも申さいのう。オツホ、ウツフ、ウツフ、足腰も立たずに口計り達者なハムも氣の毒なものだ。此通り霧が四方を立ちこめ、日輪さまの御光もなくなれば、鬼の得意時代だ。此世の名残にモ一度日輪さまの御光をみせてやりたいは山々なれど、そしては此方の働きが出来ぬサア、タール、オツトドツコイ鬼娘、一層の事喰つてやらうかい』

かく云ふ内、サツと吹来る山嵐に灰色の霧はガラリと晴れて、三人の姿はハッキリ

と分つて来た。

レープ「アツハ、、、どう／＼化けが現はれた。オイ、ハム、貴様も随分よい腰抜だなア。サア二人の後を追ひかけて見よ。腰抜の分際としてメツタに追つかける譯には行くまい」

ハム「何だ、いらん心配をさせやがつて、覺わてけつかれ、今に仇を打つてやるから」

と安心と腹立が一所になつてハムは腰の痛みも足の憊みも忘れ、スツクと立上つた。二人は肝を潰し「此奴アたまらん」と細谷みちをバラ／＼と命限りに何處もなく駆出した。

(大正一一、一〇、二二、舊九、三、松村眞澄録)

第七章 都

率

天 (二〇七二)

紫色の丈の短い芝草一面に大地に生ね茂り、岩もなければ高い木もない茫々たる大原野に、赤白黄などの小さき花が星のやうに咲き満ちてゐる。空は紺碧の雲漂ひ、太陽の影も、太陰の姿も見ねども、何とはなしに爽快な氣分の漂ふ、露の玉光る野原をヒヨロリ／＼と通つてゐる二人の男、あたりの光景の現界とはきこともなく違つてゐるのに不審を起し、茫然として足をききめ、

イール「オイ、ヨセフ、何時の間にこんな所へ吾々兩人はやつて来たのだらうか、河鹿峠の細谷路で母子二人の女巡禮に出合ひ、谷底へ取つて放られたと思つたが、あゝは夢現、如何してこんな所へ如何いふ手續きをしてやつて来たのか合點がいかぬ。

貴様何か記憶に残つてはるはせぬかな」

ヨセフ「俺の記憶に残つてゐるのは外でもない、夢ばかりだ。河鹿峠に母娘の巡禮に會うたと思つたのは、あれこそ本當の夢だよ、ここが本當の現實世界だ。現界は夢の浮世といふのだから、現界にあつた事は皆夢だ。いよく、吾々の魂の故郷現實世界へ歸つて來た、こんな結構な所へ出て來て極樂の餘り風をソヨ／＼とうけ乍ら、誰に憚る所もなく氣儘に旅行してるのは愉快ぢやないか、現界のやうに、ここは誰の領分だ、何某の土地だこせせつこましい區劃をうけてるよりも、何の制網もないこんな花園に逍遙するのは、到底現界人の夢だに知らざる所だ、あ、有難い、假令夢にしても此夢は千年も万年も去らせ度くないワ」

イール「オイあれを見よ、向うの空を、何だか妙な雲が出たぢやないか。一分間先には膨脹し、五色の雲が鮮かになつて來て、俺達の顔までに五色の光彩が輝き初めたぢやないか」

五色の雲は見る間に満天に擴がり、美はしき衣装を着けたる二人の女神、一人は年老い、一人は若く、五色の盛装をこらして、雲に乗つて此方に向つて降り來る様子であつた。自分の立つてゐる紫野の原野はいつとはなしに天へ浮上つた如く感ぜられ雲が下つたか地が上つたか區劃のつかないやうな鹽梅で、いつのまにか二人の女神は二人の前に立現はれた。よく／＼見れば河鹿峠で谷底へ投げすてられた二人の母子である。イール、ヨセフは不意の對面に打驚き、頭を下げ、

イール「これは／＼黄金姫さま誠に御無禮を致しました。どうぞお許し下さいませ」

ヨセフ 「あなたは清照姫さま、こんな尊き神さまとは知らずに御無禮を致しました。さうぞ許して下さいませ」

黄金 「其断りを言はれては困ります。私こそ女のくせに、あられもない荒男を谷川へ放り込んだり、イヤもう御無禮ばかりいたしました」

清照 「私も若い女の身を以て、荒男を谷底へほり込むなと亂暴なことを致しましたが、さうぞ許して下さい」

イール 「ハイ有難う御座います。併し乍らここは何といふ所で御座いますか、一向合點が参りません」

黄金 「ここは未來の夢想國だよ。あなたが此處へ來たのは、娑婆に於て神さまの爲に大活動をなし、神の恵に依つてかやうな天國淨土へ救はれたのだ。御互にこんな結

構なことはありません、お喜び申します」

イール 「吾々兩人は現界に於て、ロクなことは一つもやらず、何一つ神さまの爲にお役に立つたことはありません。それに斯やうな所へ救はれるとは合點が行きません、ヨモヤ人達では御座いますまいかな」

黄金 「まだお前さんは、今日の所では、これといふ手柄は一つもしてゐない、さうか
と云へば悪い事の方が多いので、公平な神さまの御審きに會へば、こんな所へ來る身分ぢやない、吾々だつて其通りだ。併し乍ら神さまは過去現在未來をお見透しだから、お前さんがこれから現界になつて、善の行ひをなし、現界を去つてから後に來るべき世界を一寸のぞかして貰うてゐるのだ」

ヨセフ 「まだこれから善をなす爲に、斯やうな所へよせて頂くとは、合點が往きませぬ

天晴れ世の中に功を立てた上のことなれば、いざ知らず、吾々のやうな汚れた靈が斯やうな所へ來るとは、如何しても合點がいきませぬ、コリヤ夢ではありますまいかな」

黄金「夢所か現實だ。それでもお前さんが、これから先へ善くない事をせうものなら、キツとこんな結構な所へは來られない、これと反對の所へ行かねばなりませんぞ。サアこれから私が、都率天の世界を案内して上げやう」

兩人「ハイ有難う」

とさしうつむく。自分の立つてゐた地上は、フワリ／＼と何處にもなく浮上るやうになつて來た。そして四人の一行は立つた儘、青雲の空を目がけて昇り行く。

見れば、忽ち眼前に現はれた朱欄碧瓦の美はしき殿堂、まはりには紅色の玉垣をめぐ

らし、金銀の砂が一面に敷きつめられ、ダイヤモンドの砂が所々に交つて、銀河の如く輝いてゐる。二人は夢かと思はかり顔見合せ、呆氣にとられて居た。

清照「コレ兩人さん、ここは都率天の月照彦さまのお宮で御座います。これからは何も云ふことは出来ませんが、吾々二人の後についてお出でなさい。神さまが何と仰有つても、お返事をしてはなりません。神さまと人間とは階級が違ひますから、神さまの思召を聞くばかりで一口も御返詞することはなりません。物が言ひたくば此門をくぐる迄に言ふておきなさい。此門をくぐるや否や、假令如何なる者に會ふても只俯むいてお辭儀さへして居れば良いのだから」

イール「ハイ畏まりました。何と思ふても本當にはしられません。本當に私は斯様な所へ、未來とやらに救はれるでせうか」

黄金「只神さまの仰せを承はり、其通り遵奉して居りさへすれば、未來は斯様な結構な所へ御参りが出来ます。何事も言つちやなりませんぞ」

イール「ハイこれ限り申しません。オイ、ヨセフお前も今の内にお尋ねしておくがいいぞ。此門内へ這入れば最早言論機關を使用することは出来ないから」

ヨセフは畏まり、静に首を傾けたきり、一言も發しない。黄金姫、清照姫は無言の儘、門番に目禮し、静に奥へくゞ進み入る。

囁然たる音楽の響き何處ともなく聞え來り、芳香四邊に薫じ、門内の内庭には白蓮華の花咲きほこり、牡丹白梅薔薇等の垣は其艶を競ひ、現界で見たこともないやうな美しき羽の小鳥は爽かな聲を出して、天國の春を歌うてゐる。黄金の玉盃を手にして黄金色の衣類を着けた美はしき女神、白装束に紅の袴にて、四人しづくゞ出で迎へ

玉盃より紫の色したる水を指にぬらして、一人々々づづ、唇にひたす。其味を云ひ香りと云ひ、何とも譬わやうなきものである。四柱の女神は四人を導いて奥深く進み入る。

奥殿深く進み入り、正面を眺むれば、金銀を以つてちりばめたる須彌壇の上に、紫摩黄金の肌をあらはし、嚴然として控む玉ふ一柱の神があつた。やさしみのある内にいへぬなつかしみがした。此神は月照彦命であつた。四人をゆかしげに見やり、黄金の御手を伸べて膝元に來れど招かれる。左右に控むたる澤山の童子は手に種々の花を携へ、無言のまま、しどやかに須彌壇の前に舞ひ狂うてゐる。馥郁たる芳香に美妙の音楽はたわす鼻耳をつき、燦爛たる殿内の光は目を新しく照すのであつた。

黄金姫は後振返り、三人を手招きする。三人は無言のまま、黄金姫の後に従ひ行けば紫の色漂ふ丸い穴が殿堂の裏より、斜に低く穿たれ、紫の階段がついてゐる。黄金姫はつか／＼と階段を降り行く。三人も其後に従つて際限もなく下り行けば、そこに雑草の茂る葦の生れた沼があつた。

二人は何時の間にか此沼の中におち込んでゐた。餘り深からねども、直立して口のあたり迄水がついて来る。少しく風が吹いて浪高くなれば、鼻をおそひ、息苦しくなつて来た。黄金姫、清照姫は如何にも、四邊を見れ共、其姿だになく、今迄美はしかりし殿堂は煙の如く消え失せ、只葦の生え茂る沼の上を秋風が吹きわたる其淋しさ。斯かる所へ何處よりともなく、レーブ、タールの兩人あわたゞしく走り來り、沼のまはりに立つて、二人の名を呼び、

「早く此方に來れ」

と差招く。イー、ヨセフの兩人は身を跳き、二人の側に泳ぎ行かんすれ共、如何したものか二人の足は沼底に漆喰の如く吸ひつけられ、身動きもならず、風に煽られて、時々高き波鼻目のあたりをおそひ來り、苦しき限りなし。二人は髻もね上げず、苦み悶わて居ると、何處ともなく、ハムはレーブ、タールの前に現はれて、三人はここに何事か口論を始め出した。イー、ヨセフの兩人は沼の中にて懶げに三人の争ひを眺めてゐる。ハムの後には口耳まで裂けた赤裸の赤鬼がついてゐた。暫くすると、レーブ、タールの兩人は沼の堤を一目散に東南さして走りゆく。ハムは二人の沼の中に苦んでゐるのを見て、助けやらんと、赤裸となり沼の中に飛びこまんすれ共、後に立つた赤鬼が、グーツと首筋を掴んで離さないで、ハムは一生懸命に身をもがいて

る。イール、ヨセフの兩人は、息もたれなくになつて、早く助けてくれよ………と叫ばんとすれ共、如何にしけん、一言も聲が出なかつた。何處ともなしに宣傳歌の聲が中空に聞えて来た。此聲を聞くに共にハムについてゐた鬼の姿は煙と消れた。ハムはレープ、タールの逃げ去つた後を追うて、地響させ乍ら歸り行く。

二人は此宣傳歌の聲を聞くに共に身體軽くうき上り、いつの間にやら沼の畔についてゐた。そして濡れた着物は何時の間にか乾いてゐる。ハテ不思議なことがあるものだなア………と兩人は顔を見合せつゝ、ハムの走つた後を追うて断出すと、一本の大きな松の木が枝振よく立つてゐて、沼の上に枝を垂れてゐる。其松の木を見上ぐれば、わもいはれぬ恐ろしき大蛇が三間ばかりの首を伸ばして樹下を眺め、大口を開いて、何者か呑まんとしてゐる。二人は始めて口を開き、

イール「オイ、ヨセフ、大變ぢやないか」

ヨセフ「如何にもイールの云ふ通り、此松の木には妙な奴が居るではないか。大方最前の三人は此大蛇に呑まれて了うたのだろ。コリヤグツ／＼してはゐられまいぞ」
と言ひ乍ら、松の根元をよく／＼見れば、土の中から首が生れてゐる。上には大蛇下には生首ハテ厭らしやと、逃げ出さうとすれ共、如何したものか、身体強直してビックともならぬやうになつてゐる。

二人は因果腰を定め、地中から生れた首をよく見れば、豈計らんや、バラモン教の大棟梁大黒主である。二人はビックリして顔色をかへ乍らあわたゞしく、

イール「あ、あなたは大黒主の神さまちや御座りませんか、如何してマアこんな所へ首ばかり出してゐられます。あれ御覽なさいませ、此松の枝には大蛇が蟠つて、今

や一口に呑まんとしてゐるぢや御座いませんか、サア早くここを私と一緒に逃げませう」

大黒主「ヨウ其方はイール、ヨセフの兩人、こんな所へ来るものではない。今の内に後へ引返したがよからう」

ヨセフ「引返さうと申して、何處へ行つてよいだら、譯が分りません、して又あなたの首から血がにじんで居りますが、コリヤまあ如何した譯ですか」

大黒主「私は天地の大神の罰をうけ、此松の木の下に於て、手足を縛られ、自分の作った配下の鬼共に土中に埋められ、此通り首のみ地上に現はし、鷹や鳥に頭をこつかれ、毒虫に首を咬まれ、こんな苦しい目に會つてゐるのだ。お前も早く改心いたして、誠の道に立返つたがよからうぞ、私の如くなつて了へばモウ駄目だ。まだ」

これから澤山の苦勞をいたして罪を赦して貰へるか貰へんか分らぬ所だ。早く三五教の神文を唱へて此急場をのがれよ」

イール「コレは又、異なることを承はります、あなたはバラモン教の大教主であり乍ら、何を以て三五教の神文を唱へて申されますか、少しも合點が参りませぬ」

大黒主は苦しげに

大黒主「現界に於ては今時めく勢なれ共、未來の我靈魂は此通り、松の下に於て無限の責苦をうけねばならぬことになつてゐるのだ。三五教は神より出でたる教、其他の教は皆枝神や人間の作つた教であるから、御神慮の程が分らない。否々神慮に違反した教を致して居るから、バラモン教の代表者たる此方が斯やうな責苦に會つてゐるのだ。さはいふもの、我の肉體は副守護神の勢ひ仲々猛烈にして到底容

易に改心は致さない。改心さへ致したらこんな苦惱は免るゝのだが、大黒主の肉體がせうしても改心してくれぬので、本尊の此方がこんな責苦に會うのだ。百年後の大黒主の行末は、即ち今の有様であるぞ。サア早くここを立去れ」

斯かる所へ、又もや三五教の宣傳歌がかすかに聞え、宣傳使が三人の伴人と共に沼の邊に現はれて来た。此聲を聞くと共に、大黒主の體は地上へガワとばかり浮上つた。樹上の大蛇は大黒主を大口開けて、グツと一口に呑んだまゝ、黒雲を喚起し、一目散に中天に姿をかくして了つた。

二人は宣傳使の姿を見るより、フツと氣が付きそこらあたりを見れば、河鹿峠の谷底に陥り前込の砂の中に半身を埋めてゐたことが分つた。谷の流れはゴウ／＼と四邊に響いてゐる。氣をおちつけてよく／＼見れば、照國別の宣傳使を始め、梅公、照公

國公の三人は二人の身体を介抱し、一生懸命に、魂呼びの神業を修してゐたことに氣が付いた。

イール、ヨセフの二人は宣傳使一行に向ひ黄金姫一行に無禮を加へて、此谷底に投げ込まれた一條より、鬼熊別に雇はれて、蜈蚣姫、小糸姫の所在を尋ね求めつゝあることを詳に物語り、ここに翻然として悟り、宣傳使に従つて、谷を下り、山路に出で、トボ／＼と後に従ひ行く。二人は何もなく、宣傳使の威光に打たれて、恐ろしくなり、あたり暗に包まれし頃、隙を窺うて逃げ失せて了つた。

照國別は道端の古き祠の前に、三人の伴人と共に一夜を明かすこととした。

(大正一一、一〇、二二、壽九、三、松村眞澄録)

第八章 母

ご 娘 (一〇七三)

月てり渡る月の國

梵天王の守ります

清き尊き國なれば

バラモン國と稱へけり

抑も月の神國は

所を以て國となし

其數七千有餘國

刹帝利族を王となし

バラモン族は淨行を

唯一の勤めと勵みしが

古き風習も今ははや

時の力に抗しかね

刹帝利族は散々な

憂目に會ひて屏息し

今は全くバラモンの

やからの掌握する迄に

國の秩序は紊れたり

七千餘國の其内に

最も廣きハルナ國

ハルナの都に現はれて

梵天王の末裔と

僭稱したる曲津神

鬼雲彦は葦原の

中津御國をあごにして

フサの國をば横斷し

自轉倒島に打わたり

暴威を揮ひるたりしが

神素蓋大神の

守り玉へる三五の

教司に退はれて

雲を霞と中空を

かけりて逃けゆく印度の國

ハルナの都に現はれて

梵天王の自在天

大國主を祀りつゝ

靈主体従を標榜し

惨虐無道の教をば
 遠き神代の昔より
 此國々の王位をば
 國の貴族を虐げて
 大黒主は我部下を
 現に幽ごの全權を
 印度の國の大王ご
 ウブスナ山のイソ館
 數多の神人從へて
 塞がる鬼雲やはんご
 開きゐるこそ忌々しけれ
 王の位を繼承し
 占めたる清き刹帝利
 バラモン族と聞わたる
 其國々に遣はして
 握らせおきて自らは
 なりすましたる時もあれ
 守り玉へる救世主
 朝な夕なに天地に
 ここに神たちより集ひ

日出別の御言もて
 姫命を始めとし
 治國別の神司
 月の國をば三方より
 あゝ、惟神々々
 此物語スク〜ご
 高里めぐる月の國
 神代の深き物語
 神の御前に願ぎまつる。
 黄金姫や清照の
 照國別や玉國別
 初稚姫に言任けて
 進ませ玉ふ尊さよ
 御靈幸はひまし〜て
 言靈車よく走り
 残る限なく巡らせて
 述べさせ玉へ 惟神

黄金姫、清照姫は河鹿峠を巡禮姿に身をやつし、上りつ下りつ、谷間の絶景を眺め

て、懸ふ折しも、ハム、イール、外三人の鬼熊別が部下に出會し、遂に道ならぬ事とは知り乍ら、正當防衛上止むを得ずして、ハム、イール、ヨセフの三人を、千仞の谷間を目がけて投込み、外二人の雲を霞と逃げゆく姿を冷やかに見守り乍ら、あたりに心をくばりつゝ、母子二人はシト／＼と、崎嶇たる羊腸の坂路を進み行きつゝ、歌ふ。

「バラモン教の副棟梁

鬼熊別の妻となり

埃及國に現はれて

教を傳ふる折柄に

天地にたがへし曲業を

知らずに勤めるたりしが

仁慈無限の三五の

神の光に照らされて

イホの都を逐電し

鬼雲彦に従ひて

天恩郷に身を隠し

月日を重ねて漸くに

バラモン教の礎を

固めてゐたる折もあれ

太玉命の宣傳使

現はれ玉ひて天地を

震撼せんず言靈を

發射し玉へば大棟梁

鬼雲彦を始めとし

彼等一族雲霞

副守の大蛇につれられて

安全地帯と聞わたる

自轉倒島の中心地

なり果物も大江山

巖の岩屋に立てこもり

三岳の山や鬼ヶ城

部署を定めてバラモンの

教を四方に宣傳し

豊葦原の瑞穂國

百八十島の果てまでも

バラモン教に歸順させ

梵天王の御教や

御稜威を四方にてらさんご

思ひし事も水の泡

英子の姫に仕へたる

神の御國の強者に

追ひやらはれて果敢なくも

鬼雲彦は逃けて行く

わが脊の君も後を追ひ

姿をかくし玉ひけり

女心のまごまでも

初心を徹さにやおかないご

鬼ヶ城をばふりすて、

安全地帯のかくれ場處

雲をまをして三國岳

岩窟に深く忍び入り

數多の部下を使役して

捲土重來バラモンの

再興はかる折もあれ

神の恵か白雲の

空わけ登る宣傳使

悪事は忽ち露顯して

すむによしなき悲しさに

心の駒ははやり立ち

善と惡との瀬戸の海

小豆ヶ島の岩窟に

身をかくしつゝ、バラモンの

教を開く傍に

小糸の姫の所在をば

焦れ尋ぬる眞最中

心曲れる友彦が

思はずここに現はれて

わが子の消息略悟り

柵なし舟を操りて

三五教の高姫ご

力を合せ海原を

渡りて進む一つ島

地恩の郷にまる上り

黄龍姫の吾娘

嬉しくこゝに面會し

三五教の神人に

導かれつゝスワの湖

玉依姫の隠れます

尊き靈地に参拜し

麻邇の寶珠の神業に

仕へまつりし嬉しさよ

四尾の山の山麓に

大宮柱太しりて

しづまり玉ふ大神の

宮居に朝夕仕へつ、

言依別の御言もて

再來るフサの國

ウブスナ山の靈場に

身魂を研きりたりしが

いよくこゝに月の國

ハルナの都に現はれし

大黒主の曲業を

ため直しつ、天地の

神の恵に浴せしめ

醜の司を始めとし

七千餘國の國人を

安きに救ひ助けんと

神の御言を畏みて

進み行くこそ嬉しけれ

河鹿峠の山路を

迎る折しも吾夫の

守らせ玉ふバラモン教

配下に仕ふる魔神たち

虎狼の心もて

われら母子を迫害し

暴威をふるひ來るより

天則違反と知り乍ら

やむに止まれず手のすさび

いで來る奴をひつつかみ

何の容赦も荒川の

谷間に向つて投げやれば

残る魔神は逸早く

雲を霞と逃げ失せぬ

さはさり乍ら彼等とて

天地の神の御水火より

生れ出でたる神の御子

悔い改めて速やかに

神魂を清め美はしき

高天原の都率天

尊き神の御前に

靈を救ひ玉ひつ、

其醜業を一日も

早く改めさせ玉へ

清照姫と諸共に

河鹿峠の山みちに

心の垢を拭ひつ、

三五教を守ります

皇大神の御前に

畏みくねぎまつる

あ、惟神々々

御靈幸はひまませよ」

清照姫は坂を下りつ、母の後について又歌ふ。

「神が表に現はれて

善神邪神を別け玉ふ

バラモン教の神司

鬼雲彦に仕へたる

父の命の鬼熊別は

無限絶對無始無終

靈力体の大元首

梵天王と聞わたる

大國彦の神靈を

自在天神とあがめつ、

常世の國をあこにして

埃及國に打渡り

天恩郷にあれまして

教を開き玉ひしが

其勢力は日に月に

入桑枝の如茂久榮に

榮に茂りて権力は

並ぶ者なき神司

數多の侍神を従へて

ヤツと心を安んじつ

副棟梁に任けられて

母命を相娶り

夫婦仲よく道の爲

仕へ給ひし雄々しさよ

二人の仲なかつに生うれたる

小糸こいの姫ひめは幼時わらわより

榮耀えいよう榮華えいげに育そだてられ

世よの荒波あらかみも知しらぬ身みの

辨わかへもなく友彦ともひこに

心こゝろを奪うばはれ海山うみやまの

恩おんある父ちち母ははをふりすて、

心こゝろの暗やみに紛まぎれつ、

戀こひしき男おとこに手てを引ひかれ

エデンの河かを傳つたひつ、

フサの海うみをば乗越のりこへて

波なみに漂いざふシロの島しま

松浦まつらの郷さとに身みを忍しのび

一年ひいてここにゐたりしが

友彦ともひこ司つかさの行ゆひに

愛想あいさうをつかし夜よに紛まぎれ

館たてを後あとに舟人ふねびとの

チャンキー、モンキーと諸共もろもろに

千波せんぱ萬波まんぱを押おしわけて

はるく進む龍宮島りゆうぐうじま

五十子いそこの姫ひめや梅子うめこ姫ひめ

三五さんご教けうを守まもります

神かみの司つかさに巡めぐり會あひ

身魂みんこん共どもに救すくはれて

神かみの威徳みとくもオスタリヤ

地恩ちおんの郷さとにかけ向むかひ

高山たかやま彦ひこや黒姫くろひめの

蔭かげの力ちからに守まもられて

一時いちじは時ときめくクキンの身み

月日つきひの如ごとき勢いきほひを

四方よもにてらしてゐたりしが

神かみの守まもりの淺あかからず

戀こひしき母ははに巡めぐり會あひ

麻邇まにの寶珠ほうしゆの神業しんげうに

仕つかへてやうく自轉倒おのころの

島しまに始はじめて立向たちむかひ

錦にしきの宮みやに暫しばらくは

眞心まごころこめて仕つかへしが

言依別ことよりのわけの教主けうしゆより

イソの館たてに母おやと子こは

さし遣はされ朝夕に

惠の露に浴しつゝ

清照姫と名を賜ひ

母子二人は潔く

三五教の宣傳に

仕ふる折しも日出別

神の司の命令で

戀しき父のますと聞く

月の都に進めよ

仰せ玉ひし嬉しさよ

神に任せし此體

いかなる惱みの來る共

いかで恐れん神の道

さやる曲津を悉く

尊き稜威の言靈に

言向和しいち早く

神の御國を立直し

月照りわたる月の國

空もハルナの都とし

照らさん爲の此首途

あゝ勇ましゝく

如何に險しき山坂も

心の駒の勇むまに

千里の道も遠からず

進み行くこそ樂しけれ

あゝ惟神々々

御靈幸はひましゝて

吾等母子の神業を

守らせ玉へと村肝の

心も清く照りわたる

清照姫がねぎまつる

あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

と歌ひ乍ら、秋風に面をふかれ、簀をあほられ乍ら、杖を力に河鹿峠を降り行く。

(大正一一、一〇、二七、舊九、八、松村眞澄録)

瑞月

惟神神の誠の御教を

普く傳ふ地上天人

秋と冬と夜なき天津神國に

靈籍を有つ神の信徒

月も日も星もかくるゝ世の中は

世の終にて始なりけり

第三篇 宿世の山道

第三章 鬼熊別部の山嶽

第九章 死 一 生 (二〇七四)

鬼熊別の部下に仕へたるカラランダ國の刹帝利、親重代のハムの位を大黒主の部下に
とり剝がれ、今は僅かに鬼熊別の部下となり、卑しき目付役に成り下り居たれども、
彼の部下は數十人密かに彼の驅使に甘んじて忠實に仕へ、昔のハムの果てとして相當
に尊敬を國民より拂はれて居た。

今しも鬼熊別が命によつて蜈蚣姫小糸姫の所在を尋ねる一方、三五教の宣傳使を一
人にも多く捕縛し歸らば、もとのカラランダ國の王に復しやらんとの契約の下に四人
の小頭 株を引き率れ、此河鹿峠に待ちつゝあつたのである。然し乍ら四人の男は此
ハムの素性を知らず、何となく横柄な奴、虫の好かない奴と猜疑の眼を怒らし、何か

失敗ある時は、これを嗅出し一々鬼熊別に内報し、目の上の痛なるハムを失墜せしめん。心密かに牒し合せつゝあつた。

かゝる處へ母娘の巡禮、進み來るに出會し、何の容赦も荒繩に、縛つてハルナの都まで、立ち歸らんと四人に下知を下した。四人は我劣らじと母娘に向つて武者振りつき、苦もなく谷間に投げ捨てられ、ハムも亦脆くも谷底に捨てられて了つた。流石利帝利の直系にて何處もなく身魂健固なりしかばイール、ヨセフの如く容易に失神せず谷底の眞砂に埋められ痛さを堪へて自然の恢復を待つ折しも、ローブ、タールの兩人は谷を渡つて近寄り來り、散々にハムの悪口を並べ立て、此際二人を助けハムを谷川へ投げ捨てやらんとこの密談を聞くより憤怒のあまり病の苦痛を忘れて、

ハム「おのれ憎くき兩人」

と立ち上ればローブ、タールはイール、ヨセフを捨て、谷川傳ひに生命辛々逃けて行く。ハムは無念の齒を喰ひしぱり、イール、ヨセフを介抱し居る折しも、頭上に聞ゆる宣傳歌「こりや堪らぬ」と章歌天走りに岩を飛び越へ淺瀬を涉り、漸く山道に攀登り片方の森を眺むれば、此處に一つの古き祠がある。一先づ此處に息休め、ローブ、タール兩人が所在を探ね、懲しめ呉れんと息まきつゝ、社前の石に腰うち掛け息を休めんとする時しも、張り詰めたる勇氣は茲にガタリと弛み、再び腰痛み足うづき、身動きならぬ苦しさに、ローブ、タールの兩人が仕打を憤慨し怨み涙に暮れてゐる。忽ち祠の後より二人の巡禮の聲、ハムは又もや二度吃驚

ハム「あ、彼は普通の巡禮ではなく、人を取り喰ふ鬼婆鬼娘であつたか」

と濃霧に包まれて怨みの的なるローブ、タールの兩人が作り聲とは知らなかつた。レ

一ツ、タールはハムの獨言を聞き、足腰立たぬにつけ込んで侮りきつて擲擲つて居たが、忽ち吹き来る山風に濃霧は晴れ其真相が曝露するに共に、怒り心頭に徹し、怒髪天を衝いて立ち上り苦しき病の身を忘れ、逃げ行く二人の後追ふて

タール「逃しはせじ、思ひしれや」

と言ひ乍ら握り拳を拵へ乍ら、さしも險しき阪道をトン／＼と地響きさせ阿修羅王の荒れし如く進み行くこそすさまじき。

ハムは痛さを忘れ一歩々々拍子をとり乍ら歌ひ出した。

ハム「時世時節と云ひ乍ら　　ガラランダ國の利帝利

親代々のハムの俺　　鬼熊別の部下となり

時待つ尊き身と知らず　　卑しきレーブやタール奴が

侮りきつたる其態度

小楯に觸る俺の胸

一度は懲しめやらんずと

思ひは胸に満ちぬれど

我目的を遂ぐるまで

怒つちや損だと辛抱して

知らぬ顔にて過ぎて来た

河鹿峠の山道で

テツキリ合ふた母娘連

此奴あテツキリ蜈蚣姫

小糸の姫と知つたれど

さう言つたなら彼奴奴等は

腐つた肉を犬の子が

争ふ如くに噛み合ひ

互に手柄の取りやりを

おつ初めるに違ひない

一つも取らず二も取らず

チャツチャ、ムチャクになるだろと

思案を定めて空惚け

婆と娘であつたなら

ハルナの都へ連れ歸り

鬼熊別の御前に

奉らうかどあやつりて

彼等四人を誑らかし

首尾よう目的達しなば

途中に彼を追ひ散らし

愈此處で名のり合ひ

忠臣義士となりすまし

一人甘い事してやらうと

思ふた事も水の泡

ウントコ、ドツコイ、

アイタツタ

あんまり我身の慾ばかり

企んだおかげで罰當り

蜈蚣の姫や小糸姫

二人の司に谷底へ

不敵の力で投げ込まれ

くたばりきつた果敢さよ

後悔胸に迫り来て

涙に暮る、折からに

悪運強い兩人が

虎口を逃れて谷底へ

尋ね來りて囁くを

死んだ真似して聞き居れば

口を極めて罵りつ

イール、ヨセフは助けても

ハムは助けちや堪らない

人事不省を幸ひに

此谷川に水葬と

無禮な事を吐かす故

あまりの事に立腹し

痛さを忘れて立ち上り

拳を固めて睨まへば

卑怯未練な兩人は

親しき友の危難をば

後に見捨て、逃けて行く

後に残りしハム公は

二人の生命を助けんと

人工呼吸の眞最中

三五教の宣傳歌

雷の如くに聞え来る
 身の苦しきは限りなく
 レーブ、タールの後追ふて
 グタリと弛んだ心持
 足は痺れて動けない
 忍び居るとは知らずして
 悔む折しも婆の聲
 俺は鬼婆鬼娘
 蜈蚣の姫や小糸姫
 人をとり喰ふ鬼母娘
 頭は痛み胸塞ぎ
 二人の奴を見殺しに
 祠の前に来て見れば
 再び腰は痛み出し
 二人の奴が床下に
 愚痴の繰言並べたて
 續いて娘の聲聞ゆ
 喰つてやらうとの御挨拶
 二人と見たのは目のひがみ
 しまつた事になつたわい

何程強いハムさんも
 鬼に向つちや堪らない
 逃れにやならぬと色々
 鬼婆益々圖に乗つて
 俺も今こそ身を落し
 其源を尋ねれば
 國人達にハムさんと
 心弱くちや堪らない
 卑怯な最後を遂げんより
 覺悟を極むる時も時
 神變不思議の魔力ある
 何と云つて此場合
 言葉を構へて宣りつれば
 無体の事を喋り出す
 捕手、目付となりつれど
 ガランダ國の刹帝利
 尊敬せられた身の上じや
 假令脛腰立たずとも
 玉と碎けて死なうかと
 俄に吹き来る山嵐

四邊を包みし雲霧も

茲に漸く晴れ渡り

よくく見れば此は如何に

レーブ、タールの兩人奴

身体の不自由をつけ込んで

刹帝利族のハムさんを

侮りきつて馬鹿にして

居やがる態度の面憎さ

忽ち怒髪天を衝き

腰の痛みも打忘れ

此處まで追つかけて来たりしが

又もや腰が痛み出し

足が怪しくなつて来た

あ、惟神々々

神の恵みを蒙りて

何卒ハムが足腰を

いと速かに健やかに

治し給はれ惟神

お願申し奉る

アイタ、タツタアイタツタ

もう一步も行かれない

天地の神もバラモンの

百の神々一柱

聞いて下さる神なきか

愚痴を云ふのじやなければ

こんな時こそ神様に

助けて欲しさに朝夕に

バラモン教の御爲に

盡して居るのじやムらぬか

思へばく残念や

もう一寸も進めない

大方俺は野たれ死

不運な者は何處までも

不運で終らにやならないか

虎狼や獅子熊の

餌食となつてしまふのか

ガランダ國のハムの身も

斯うなり行くときは白雲の

遠き異國の山の道

空行く雲も心あらば

我消息をガランダの

妻の御許におこつれよ

頼みの綱もつきはてし

悲惨至極の今日の身は

悪の鑑と天地の

神の心に出でますか

遠津御祖の盡してし

百の罪科身にうけて

此處で死なねばならないか

思へばく残念じや

これほご神に祈れども

しるしなければ是非もない

最早決心した上は

死をも恐れぬ我體

神の御手に任します

屍は野邊に曝すとも

不老不死なる靈魂は

高天原の都率天

尊き神の御前に

救はせ給へ惟神

バラモン教の大御神

御前に祈り奉る」

と涙の聲を絞り山道にドツと倒れ、觀念の目を瞬いて致死の期を待つ事となつた。此時何處ともなく微妙の音楽聞え來り、翩翩として白蓮華の花片、天より降り來ると見る間に、ハムの體は俄に清涼水を嚙下したるが如き氣分に漂ひ瞬く間にもこの健全體となり變つた。ハムは喜びのあまり、天地に感謝し、今までの言心行の一致せざりし罪を謝し乍ら、悠々として坂道を下り行く。あ、惟神靈幸倍坐世。

(大正一一、一〇、二七、舊九、八、北村隆光録)

瑞 月

紅の楓は庭に散り敷きて

夜の嵐を物語りつゝ

第一〇章 八の字 (一〇七五)

レーブ、タールは河鹿峠の谷底に投げ込まれたるイール、ヨセフの兩人を人工呼吸を以て助けんと丹精を凝らす折しも、人事不省に陥りしと思ひ居たるハムは俄に立ち上り、怒りの聲を放ちて二人を懲さんせしより、「こりや堪まらん」と行歩艱難の谷間を猿の如く傳ひて、漸く道傍の古き祠の下に身を潜め息を休めて居た。そこへハムがやつて来て脛腰たゝぬ様になり、啣ち嘆くを聞いて俄に元氣つき、弱身につけ込む風の神ならねども、鬼婆鬼娘の聲色を使つてハムを恐喝しつつ得意がつて居る。折しもあれやサツト吹き来る山風に四邊を包みし濃霧は拭ふが如く晴れ渡り、互に見合す顔と顔、ハムは益々怒り、身の苦痛を打忘れて立ち上り、

ハム「無禮者、懲して呉れん、思ひ知れや」

と京歌天走りに追駆け来る凄じさ。二人は心も心ならず一目散に木の葉散敷く山道を地響きさせ乍らトン／＼と下り行く。レーブは途々足拍子をとり乍ら唄ひ始めた

レーブ「バラモン國に名も高き　　ハルナの都に現はれし

大黒主に仕へたる　　鬼熊別の部下となり

蜈蚣の姫や小糸姫　　君の御言を蒙りて

所在を探ぬる折柄に　　イソの筋に程近き

河鹿峠に来て見れば　　山の小路を傳ひ来る

母娘二人の巡禮姿　　ハムの司は躍り立ち

今や我々五人連れ　　手柄現はす時來ぬと

手に唾して待ち居たり

かくそは知らぬ母娘連れ

草鞋脚絆に身を固め

扮装も軽き蓑笠の

金剛杖にて地を叩き

降り來れる面白さ

母娘二人の巡禮は

谷間の景色を打眺め

千黄萬紅輝きし

錦の山を打眺め

感賞したる隙を見て

ハムの目配せ諸共に

木の葉の茂みをかき分けて

大手を廣げ衝つ立てば

母娘の巡禮は腹を立て

武者振りついた荒男

物をも云はず驚掴み

千尋の谷間に投げ棄てぬ

ヨセフ、イールやハム三人

果敢なき姿を見るにつけ

張りきり居たる勇氣まで

何時の間にやら消滅し

憶病風に煽られて

命あつての物種と

後をも見ずに逃けて行く

足を早めて七八丁

下手の方に現はれて

激潭飛沫の谷川に

藤蔓傳ひ下り立ち

又もや川を遡り

至りて見れば此は如何に

三人は此處にまいごみの

中に棄てられ身も魂も

半死半生の其利那

救ひやらんと兩人が

谷の清水を手に掬ひ

イール、ヨセフに吞ませつゝ

人工呼吸の介抱に

暫し時をば移しける

死んだと思ふたハムの奴

悪運強く生復り

二人を目蒐けて追ひ来る

こりや堪らぬと兩人は

虎口を逃れし心地して

命からく逃げて行く

ウントコ、ドツコイアイタツタ

タールよ氣をつけ石がある

此處は大蛇の棲處ぞや

漸う谷川下り来て

道の傍の古祠

床下深く忍び込み

慄ひ居たりし折柄に

又もやハムがやつて来て

拳固をかためて追ひ来る

其勢ひに僻易し

二度屹驚の我々は

躰も宙に飛ぶ如く

此坂降る恐ろしさ

あゝ惟神々々

神が表に現はれて

善と悪とを立て別ける

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

直日に見直し聞直し

宣り直しつゝ、兩人が

身の過ちを許せかし

我等の頭と仰ぎたる

ハムに決死の勇あるも

神の力を現はして

言向和せ我々が

身の災を拂ひませ

あゝ、惟神々々

御靈幸ひませよ

と歌ひ乍ら細き谷道を下り行く。

タールは又歌ひ出した。

タール「ガランダ國から現はれた ガタクタ男のハム公が

チヨン猪口才な我々を

追ひ駈けまはすは何の事

拔山蓋世の勇あるも

バラモン教にて鍛へたる

我言靈の神力に

木の葉の風に散る如く

吹き散らさんかと思へども

やつぱり俺は弱い奴

「いら」と一聲云つたきり

頭の頂から足の尖

電氣にうたれし其如く

ビリ／＼と震ひ出す

不思議な力を持つた奴

強い奴にはドツと逃げ

弱い奴には攻めて行く

之が孫吳の兵法だ

抑軍の掛引は

三十六計ありと云へ

命を大事に逃げ出すが

一番利巧なやり方だ

何程神の道じやとて

命をえられちや堪らない

ウントコ、ドツコイ、ドツコイシヨ

レープの足は遅いぞよ 愚圖々々してると追付いて

ハムの奴めが後から

俺の頭をボカ／＼と

鬼の戯をふりあけて

打すが最後ウントコシヨ

ウンと一聲果敢なくも

此世の別れ死出の旅

こんなつまらぬ事はない

こりや／＼もつと早う走れ

俺から先へ走らうか

お前の様な足遅が

先へ行くのは物騒な

せめて俺だけ一人なと

命を保たにやなるまいぞ

ウントコ、ドツコイ辛氣やな

響碌爺の道連れは

ほんに心が揉めるわい

それく近寄る足音が

ドンくくく聞わてる

ウントコドツコイ、こら違ふた

谷間を流るゝ水の音

さは去り乍ら我々は

愚圖々々しては居られない

一方は谷川一方は

険しき山に囲まれし

喉首見た様な一筋道

木の葉の茂みがあるならば

一寸潜んで見たいけれど

生憎此處は禿山だ

此奴あ堪らん、さうしやうぞ

地獄の旅をする様な

怪態の心がする様だ

アイタタタツタ、アイタツタ

ロープ一寸待て、俺や倒た

擦り剝けよつた膝頭

タラく流れる赤い血が

こんな處へ追ひついて

頭をポカくやられたら

おたまりこぼしは無い程に

こらくロープ一寸待て

友羨甲斐のない男

友の難儀をふり棄て、

後白雲と走り行く

お前の薄情な其仕打

あ、く痛い足疼く

こんな事だと知つたなら

早く逃げたらよかつたに

二人の奴が助けたさ

恐ろし谷間に下り立つて

虻蜂とらすの惨い目に

會ふたるタールの苦しさを

あ、惟神々々

御靈幸ひましめて

ロープの足を留めるか

ハムの脛腰抜かすなと